

# 南原遺跡 XIII

埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

埼玉県戸田市教育委員会



## はじめに

埼玉県南東部に位置する戸田市は、荒川の自然に恵まれ、古くから交通の要衝として発展してきました。現在は交通の利便性から都心部のベットタウンとして市街地化が進み、人口13万人を超える都市に成長しています。

近年、まちの景観の変化とともに社会的、文化的な環境も変わってきておりますが、古来より受け継がれてきた伝統や文化を守り、人々の絆を一層強いものとするために、文化財の保護が求められています。

今回報告いたします南原遺跡第13次発掘調査は、共同住宅建設工事に伴い、平成26年に緊急発掘調査が行われたものです。この発掘調査により、古墳時代前期に生活を営んだ人たちが遺した貴重な痕跡を多数検出し、当時の人々の生活や土地利用のあり方などを知る良好な資料を確認することができました。本書が、戸田をより深く学習するための一助となることができたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、ご尽力、ご協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

戸田市教育委員会

教育長 羽富 正晃



# 例 言

1. 本書は、埼玉県戸田市南町 2301 - 1, 2 に所在する南原遺跡第 13 次発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社エフ・ジェー・ネクスト（代表取締役 肥田幸春）による共同住宅建設工事に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会（担当者：岩井聖吾）が株式会社東京航業研究所の支援を受けて実施した。また、整理作業、報告書作成作業は、戸田市教育委員会が株式会社東京航業研究所の支援を受けて実施した。
3. 発掘調査は、平成 26 年 8 月 20 日から平成 26 年 9 月 6 日まで行い、整理作業・報告書作成作業は平成 26 年 9 月 8 日から平成 27 年 3 月 25 日まで株式会社東京航業研究所事務所で実施した。
4. 発掘調査から報告書作成までの事業費は、全て事業者の負担による。
5. 本書は埼玉県戸田市教育委員会が刊行した。
6. 本書は、岩井聖吾が監修した。編集は長井光彦が行った。執筆は第 1 章第 2 節、第 2 章第 4・5 節、第 3 章は諸星良一が、その他の部分は岩井聖吾が行った。
7. 発掘現場および出土遺物の写真撮影は諸星良一・村井健三が行った。
8. 本書の著作権は、戸田市教育委員会が保有する。
9. 出土遺物及び発掘調査に伴う各種データ等はすべて戸田市教育委員会が保管し、活用を図るものとする。
10. 調査および本書を作成するにあたり、次の方々・機関にご指導、ご協力を賜った。  
小島清一 長澤有史 福田 聖 吉田幸一 若松良一  
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課  
戸田市立郷土博物館（敬称略 五十音順）
11. 本事業は以下の組織により実施した。

**【埼玉県戸田市教育委員会】**

教 育 長 羽富 正晃  
教 育 部 長 山本 義幸  
次 長 小沼 利行  
生涯学習課長 頓所 博行  
生涯学習課主幹 津田 孝一  
生涯学習課主事 池上 裕康  
岩井 聖吾（調査担当者）

**【株式会社東京航業研究所】**

調 査 員 諸星 良一

発掘調査および資料整理参加者

伊東 豊 伊藤 茂 榎本 昇 大熊福太郎 菊池久美子 小林君夫 島田真紀子 立川英二  
富永義昭 富山絵里子 永田正博 平野由美子 藤田真紀



# 凡 例

1. 挿図中の地図、検出遺構実測図等の方位は、図中に真北の方位を示した。
2. 本書の国家座標、緯度、経度は世界測地系に則している。
3. 遺構番号は調査の進捗過程で、そのプランの確認された順に遺構の種別ごとに付したが、整理・報告書作成作業の過程で遺構番号を振り直している。  
なお、遺構略号は下記のとおりである。  
SI：住居跡    SX：周溝状遺構    P：ピット
4. 発掘調査時の土層観察における色調の記録及び遺物観察における色調は、『新版 標準土色帖』2013年度版（小山正忠・竹原秀雄 編・著者、農林水産省農林水産技術会議事務所 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修、日本色研事業株式会社 発行）を参考にした。
5. 遺物実測図の天井面は、正面図上に示した。
6. 遺構図・遺物実測図中のトーンは次の通りである。  
施釉範囲・焼土……■    炭化物……■    赤彩……■
7. 遺物観察表法量の（ ）の値は残存部からの推定値、< >の値は残存高を示す。
8. 遺物実測図および遺構実測図の縮尺はすべて挿図中に示した。
9. 標高は、T. P（東京湾中等潮位）を基準とした。
10. 出土遺物の註記は、下記の原則に基づき行った。

例：MH.    XIII.    S I. -    1.    2 5  
      └──┬──┘    └──┬──┘    └──┬──┘    └──┬──┘    └──┬──┘  
      遺跡略号    調査次    遺構種別    遺構番号    遺物番号

表面採取遺物や攪乱層出土遺物については、遺跡略号及び調査次のみを掲載した。

なお、写真図版中の遺物写真には、旧遺構番号のまま註記を修正していないものがある。

11. 単独のピットはP1、P2、遺構に付属するピットはP①、P②と表記した。
12. 写真図版中の遺物写真の縮尺は、全て4分の1である。

# 目次

はじめに

例言／凡例

目次／挿図目次／挿表目次／図版目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2節 発掘調査の経過・・ 2

第2章 周辺環境と調査の概要

第1節 地理的環境・・ 3

第2節 歴史的環境・・ 4

第3節 調査の概要・・ 6

第4節 グリッドの設定・・ 10

第5節 地形と基本土層・・ 11

第3章 遺構と出土遺物

第1節 住居跡・・ 12

第2節 周溝状遺構・・ 21

第3節 ピット・・ 29

第4章 まとめ・・ 30



## 挿図目次

第1図	埼玉県の地形	3	第16図	第3号住居跡出土遺物実測図	19
第2図	戸田市域の地形	5	第17図	第4号住居跡実測図	20
第3図	南原遺跡周辺遺跡	7	第18図	第4号住居跡出土遺物実測図	20
第4図	南原遺跡調査地点	8	第19図	第1号周溝状遺構遺物出土状況図	21
第5図	調査区全体図・等高線図	10	第20図	第1号周溝状遺構実測図	22
第6図	基本土層	11	第21図	第1号周溝状遺構出土遺物実測図	23
第7図	第1号住居跡炭化材・遺物出土状況図	12	第22図	第2号周溝状遺構実測図(1)	24
第8図	第1号住居跡実測図(1)	13	第23図	第2号周溝状遺構実測図(2)	25
第9図	第1号住居跡実測図(2)	14	第24図	第2号周溝状遺構実測図(3)	26
第10図	第1号住居跡出土遺物実測図	14	第25図	第2号周溝状遺構実測図(4)	27
第11図	第2号住居跡実測図(1)	15	第26図	第2号周溝状遺構出土遺物実測図	27
第12図	第2号住居跡実測図(2)	16	第27図	第3号周溝状遺構実測図(1)	28
第13図	第2号住居跡出土遺物実測図	17	第28図	第3号周溝状遺構出土遺物実測図	28
第14図	第3号住居跡実測図(1)	18	第29図	第1～6号ピット実測図	29
第15図	第3号住居跡実測図(2)	19			

## 挿表目次

第1表	南原遺跡周辺遺跡の概要	7
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	14
第3表	第2号住居跡出土遺物観察表	17
第4表	第3号住居跡出土遺物観察表	19
第5表	第4号住居跡出土遺物観察表	20
第6表	第1号周溝状遺構出土遺物観察表	23
第7表	第2号周溝状遺構出土遺物観察表	27
第8表	第3号周溝状遺構出土遺物観察表	28
第9表	ピット計測表	29

# 図版目次

## 図版 1

- 1 調査区全景
- 2 第 1 号住居跡炭化材・遺物出検出状況  
(南東より)

## 図版 2

- 1 第 1 号住居跡遺物検出状況 (1) (南より)
- 2 第 1 号住居跡遺物検出状況 (2) (南より)
- 3 第 1 号住居跡完掘状況 (南より)
- 4 第 1 号住居跡 P1 土層断面 (南より)
- 5 第 1 号住居跡掘方完掘状況 (南東より)

## 図版 3

- 1 第 2 号住居跡完掘状況 (東より)
- 2 第 2 号住居跡土層断面 (西より)
- 3 第 2 号住居跡掘方完掘状況 (南東より)
- 4 第 3 号住居跡遺物検出状況 (1) (東より)
- 5 第 3 号住居跡遺物検出状況 (2) (東より)

## 図版 4

- 1 第 3 号住居跡完掘状況 (東より)
- 2 第 3 号住居跡土層断面 (東より)
- 3 第 4 号住居跡完掘状況 (東より)
- 4 第 1 号周溝状遺構遺物検出状況 (1)  
(西より)
- 5 第 1 号周溝状遺構遺物検出状況 (2)  
(南より)

## 図版 5

- 1 第 1 号周溝状遺構完掘状況 (東より)
- 2 第 2 号周溝状遺構遺物出土状況
- 3 第 2 号周溝状遺構完掘状況 (南東より)
- 4 第 2 号周溝状遺構土層断面 (南より)
- 5 第 3 号周溝状遺構完掘状況 (東より)

## 図版 6

- 第 1 号住居跡出土遺物
- 第 2 号住居跡出土遺物
- 第 3 号住居跡出土遺物
- 第 4 号住居跡出土遺物

## 図版 7

- 第 1 号周溝状遺構出土遺物
- 第 2 号周溝状遺構出土遺物
- 第 3 号周溝状遺構出土遺物

# 第 1 章 調査に至る経緯と経過

## 第 1 節 調査に至る経緯

平成 25 年 11 月 8 日、株式会社エフ・ジェー・ネクスト（以下「事業者」という）から戸田市教育委員会（以下「市教育委員会」という）に対し、戸田市南町 2301 - 1, 2 における 1,208.82 m<sup>2</sup>の共同住宅建設事業計画と埋蔵文化財の取扱いについて相談があった。

市教育委員会では、事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地周辺地域内（南原遺跡）に所在しており、開発工事中に埋蔵文化財が発見される可能性が高いため、事業者に対し工事着手前に試掘確認調査を実施するよう指導した。

これを受け、平成 26 年 4 月 17 日に事業者から市教育委員会に対し試掘確認調査の依頼書が提出され、試掘確認調査を実施することとなった。

試掘確認調査は、市教育委員会が平成 26 年 5 月 1 日に実施し、古墳時代前期の周溝状遺構、ピットとこれに伴う土師器を確認した。

この調査結果に基づき、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更・増補を行い、平成 26 年 5 月 12 日付戸教生第 199 号にて埼玉県教育委員会（以下「県教育委員会」という）あてに報告および遺跡分布地図、遺跡台帳への登載依頼を行った。

その後、事業者、市教育委員会間で埋蔵文化財の保存について協議をもち、基礎工事等で埋蔵文化財の破壊を免れない部分（154.24 m<sup>2</sup>）については記録保存のための緊急発掘調査、保護層を確保し埋蔵文化財に影響を及ぼさない部分（100.22 m<sup>2</sup>）については埋蔵文化財の現状保存、試掘確認調査で埋蔵文化財を検出していない部分（954.36 m<sup>2</sup>）については慎重工事の措置を実施することで合意した。

平成 26 年 8 月 18 日、事業者から文化財保護法第 93 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成 26 年 8 月 19 日付戸教生第 633 号にて県教育委員会あてに進達した。

文化財保護法第 93 条の届出を受けて、県教育委員会から事業者に対し、平成 26 年 8 月 26 日付戸教生文第 5 - 753 号で、申請地内における工事着手前に発掘調査を実施するよう指示があった。

発掘調査の実施にあたり、事業者は市教育委員会に対し、平成 26 年 8 月 18 日付で発掘調査の依頼書を提出した。また、同日付戸教生第 595 号にて 2 者による「共同住宅建設事業予定地にかかる埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を締結した。

そして、文化財保護法第 99 条の規定に基づき、市教育委員会から県教育委員会あてに平成 26 年 8 月 19 日付戸教生第 631 号にて埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、南原遺跡第 13 次発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 発掘調査の経過

### 1. 発掘調査

発掘調査に先立ち、平成26年8月18日に発掘器材の搬入と調査区の設定を行った。また8月19日には仮設トイレを搬入し、囲柵の設置を行った。8月20日に表土掘削用の重機を搬入して調査を開始した。表土掘削は、調査区西側から開始し、当日は80㎡ほどを掘削した。8月21日は重機による表土掘削を一時中断し、作業員を投入して遺構確認作業および調査区北壁において基本層序の確認と遺構確認面の見極めにつとめた。調査区は東側が大きく攪乱を受けていたことが判明し、遺構も確認されなかったこともあり、8月22日に表土掘削を完了、同時に遺構調査を開始した。遺構調査は、第2号周溝状遺構(SX02)と、確認面において最も遺構の重複があると思われた西壁に沿ってサブトレンチを設定するところから始めた。8月28日には、第1号住居跡(SI01)より多量の炭化材が検出され、焼失住居を確認した。8月30日は第1号周溝状遺構(SX01)から遺物の集中箇所を検出し、微細図の作成を行った。9月4日には全ての遺構の調査を完了し、9月5日にはラジコンヘリを用いた空撮を行った。9月6日には調査区を埋め戻し、重機や仮設トイレの搬出、発掘器材や遺物、図面の撤収を行い、現地での調査を全て完了した。

### 2. 整理調査

整理作業は平成26年9月8日より開始した。出土遺物については、10月1日より洗浄・註記を開始し、11月5日より接合に着手した。12月5日より報告書掲載遺物の抽出を行い、遺物実測図の作成を開始した。遺物実測終了後、観察表の作成と実測図のデジタルトレースを行った。検出遺構については、10月1日より遺構原図のデジタルトレースと、光波測定器の測定データを用いた各種遺構図版の作成を開始した。平成27年2月2日より報告書レイアウトを開始し、2月16日に掲載遺物の写真撮影を行った。報告書作成にはAdobePhotoshop、AdobeIllustrator、AdobeInDesignを用い、INDD形式ファイルにて入稿した。

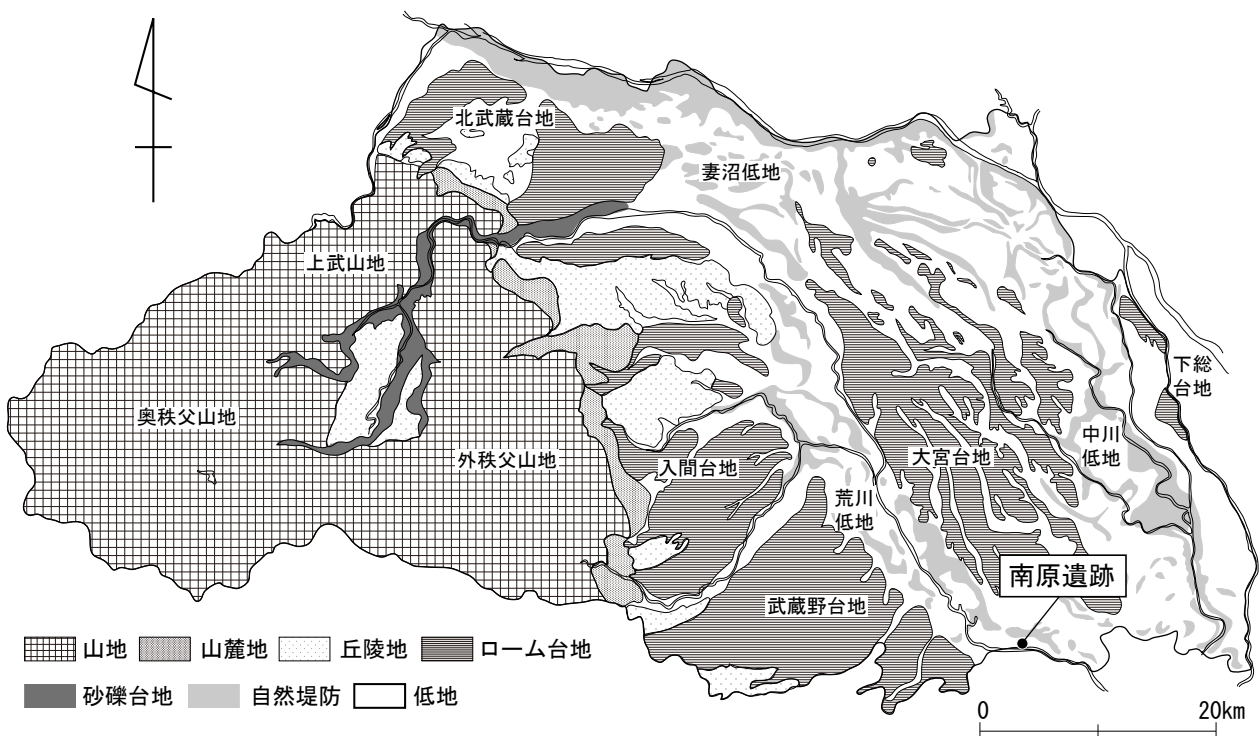
## 第2章 周辺環境と調査の概要

### 第1節 地理的環境

南原遺跡が所在する戸田市は、埼玉県最南端部に位置し、東西約6.0km、南北約3.0km、面積18.17km<sup>2</sup>の東西に細長い形状を呈する。北はさいたま市、東は蕨市と川口市にそれぞれ地続きで接し、西の朝霞市と和光市、南の東京都板橋区と北区には荒川を隔てて接している。市域には国道17号線(中山道)や新大宮バイパスが南北に走り、また首都高速5号線や東京外郭環状道路、JR埼京線の開通により、交通の利便性が高まり急激な市街地化が進んでいる。また、都心に近い立地のため、工場や流通センターなども数多く所在する。

戸田市の地形は、埼玉県西部の山地に端を発する荒川によって形成された平坦な沖積低地(荒川低地)が全域を占める。荒川は氾濫や流路の変更によって、市域の中央部を西から東にかけて自然堤防を形成している。この自然堤防は荒川旧河道に沿うように発達し、戸田市域では美女木から笹目を通り、本町、上戸田を抜けて川口市へと断続的に延びている。

南原遺跡は、JR埼京線戸田公園駅から南西約500mの戸田市南町を中心に広がる遺跡である。遺跡の南側には戸田漕艇場が所在し、そのさらに約500m南には荒川が東流する。遺跡周辺は、昔から「高知原<sup>たかちばら</sup>」と呼ばれ、遺跡の所在が確認された当時は戸田市域の中でも比較的起伏の見られる高所であったと言われている。遺跡の北側には、治水のために掘られた菖蒲川が東流するが、この周辺にはかつて「菖蒲沼<sup>しょうぶぬま</sup>」と呼ばれた低湿地が広がっていた。この低湿地は長年にわたり水田として利用さ



第1図 埼玉県の地形

れてきたが、現在は土地区画整理に伴う埋め立てや整地が行われ、倉庫や工場、住宅などが立ち並ぶ平坦な市街地となっている。

過去の発掘調査では、遺跡の南東部に南西—北東方向に流れた旧河道が確認されており、遺跡が立地する自然堤防を東西に分断していることがわかっている。今回の調査地は新たに南原遺跡の範囲に加えられた範囲であり、遺跡の北西端に所在している。今回の調査で本調査区が東側に入り組む谷に向かって地山が緩やかに傾斜していることが判明しており、調査区が西側へ広がる自然堤防の東端に立地していることがわかっている。

## 第2節 歴史的環境

戸田市では旧石器時代の遺構・遺物は確認されておらず、過去の生活の痕跡が見え始めるのは縄文時代からである。現在、縄文時代に帰属する遺跡は確認されていないが、縄文時代前期後葉から後期中葉までの土器片が確認されている。縄文時代前期では、堤外から前期後葉諸磯 a 式の破片資料 1 点が出土しており、本町からは前期末十三菩提式深鉢形土器の大型破片 1 点が出土している。縄文時代中期では、中葉から後葉にかけての遺物が出土している。鍛冶谷・新田口遺跡では勝坂式や加曾利 E 式の破片資料の出土が報告されており、南原遺跡などでも阿玉台式や加曾利 E 式期の土器片が微量ながら検出されている。縄文時代後期は、前葉から中葉にかけての遺物が検出されている。鍛冶谷・新田口遺跡では堀之内式、加曾利 B 式の土器片が出土しており、堤外からも同型式期に帰属する土器破片が出土している。

縄文時代後期後葉から弥生時代中期にかけての遺構・遺物は確認されていないが、弥生時代後期から古墳時代前期になると、戸田市域の自然堤防上に多くの遺跡が形成されるようになる。弥生時代後期から古墳時代前期では、前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南町遺跡、南原遺跡、上戸田本村遺跡、根木橋遺跡で遺構・遺物が検出されている。この中でも鍛冶谷・新田口遺跡は、当該期の方形周溝墓(周溝状遺構)群や集落跡が検出され、弥生時代から古墳時代に低地に形成された稀有な集落遺跡として、昭和 51 年に埼玉県選定重要遺跡に選定されている。上戸田本村遺跡では、2 次・3 次調査において環濠と思われる溝状遺構と、溝の東部に密集する竪穴住居群を検出しているため、遺跡周辺に当該期の環濠集落が存在した可能性が高い。

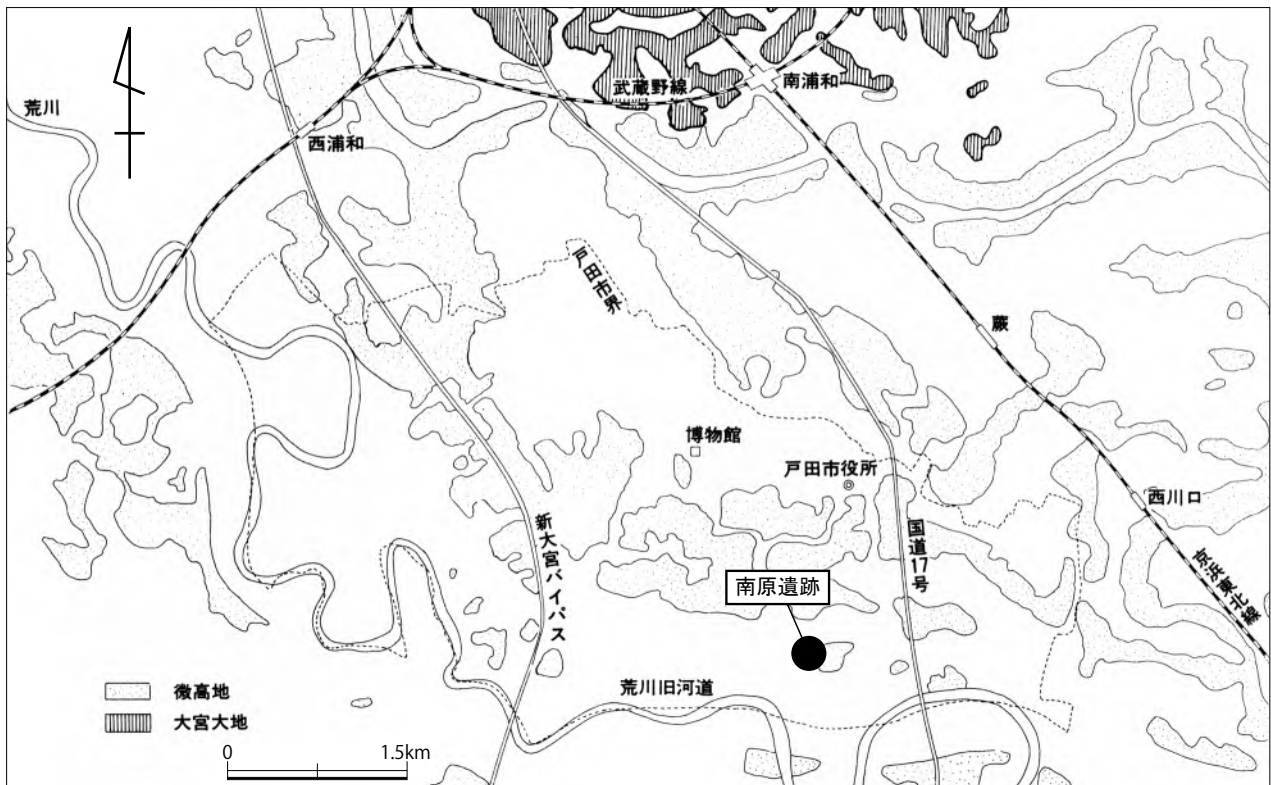
古墳時代中期の遺構・遺物が検出された遺跡は少なく、南原遺跡 2 次調査 B 区で竪穴住居 3 軒、9 次調査で井戸跡 1 基、10 次調査で竪穴住居 1 軒と土坑 2 基が確認されたのみである。

古墳時代後期は、上戸田本村遺跡や南原遺跡周辺で群集墳が形成される時期である。上戸田本村遺跡内にはかつて「くまん塚」と呼ばれた古墳が所在した。「くまん塚」は円墳で、墳丘の盛土が僅かに残存していたとされ、そこから横穴式石室の石材の一部と直刀 2 振が出土したと言われている。また、上戸田本村遺跡では 1 次調査において鬼高式期の住居跡 2 軒、4 次調査において馬形埴輪や人物埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が 1 基検出され、南原遺跡では 2 次調査 A 区で円形周溝墓(円墳) 1 基、3 次調査 D 区で鬼高式期の住居跡 1 軒と屋外竈 1 基、4 次調査で円形周溝墓(円墳) 2 基、6 次調査で円形周溝墓(円墳) 1 基、8・9 次調査で馬形埴輪、人物埴輪、家形埴輪、円筒埴輪等が

出土した古墳周溝が1基と埴輪を持たない古墳周溝1基が検出されている。

平安時代では、南原遺跡や鍛冶谷・新田口遺跡、前谷遺跡で竪穴住居や掘立柱建物跡、井戸跡、土坑群、ピット列等が検出されている。前谷遺跡では2・4次調査において瓦塔片が出土しており、9世紀頃に調査区周辺に仏堂施設を有する集落が存在していた可能性が指摘されている。

中世は、市の西部からさいたま市の南西部の地域がかつての佐々目郷（篠目・笹目）に該当し、鎌倉鶴岡八幡宮の社領であったことが文献史料からわかっている。当該期では、大前遺跡や前谷遺跡、上戸田本村遺跡、南原遺跡、南町遺跡、美女木八幡社脇遺跡で掘立柱建物跡や溝状遺構、井戸跡が検出されている。前谷遺跡や南原遺跡、上戸田本村遺跡からは断面が葉研形の溝状遺構が検出されていることから、『新編武蔵国風土記稿』の桃井氏の居城であったとされる「戸田の御所」や渋川氏の居城であったとされる「蕨城」との関連が指摘されるが、未だその明確な位置や検出された遺構との関係性については明らかになっていない。



第2図 戸田市域の地形

### 第3節 調査の概要

南原遺跡は、本調査を含めてこれまでに13回にわたる発掘調査が行われ、弥生時代後期後半から近世に渡る複合遺跡であることがわかっている。特に、古墳時代後期では遺跡の西側に群集墳が築造され、第1・2・8・9次調査で形象埴輪を有する小規模な円墳が合計2基検出されている。

第1次調査は、倉庫建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が昭和44年8月26日から8月4日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、古墳時代後期の古墳周溝1基（南原1号墳）、中世の溝跡2条を検出した。周溝状遺構からは底部穿孔がなされた壺形土器などが出土した。また、古墳周溝からは、鴻巣市生出塚埴輪窯で製作されたものと考えられる人物埴輪や靱形埴輪、円筒埴輪が出土し、戸田市における初めての埴輪出土事例として近隣住民の注目を集めた。

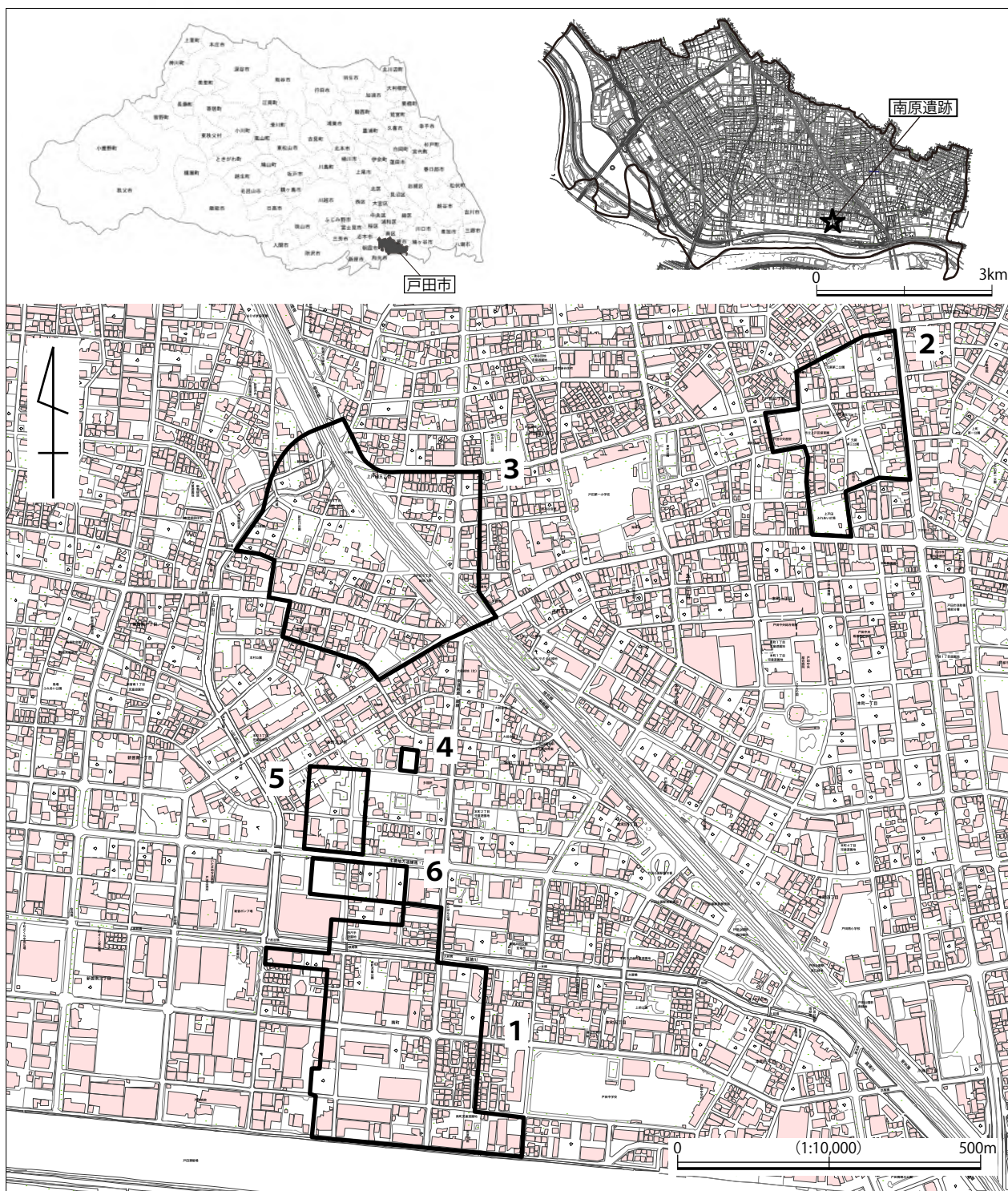
第2次調査は、戸田市教育委員会が昭和45年7月25日から8月5日までの期間で実施した。調査区は、第1次調査区の南方を拡張したA区、第1次調査区の南東にB区の2区が設定された。A区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構4基、竪穴住居5軒、第1次調査で検出した古墳周溝の続きを含め古墳周溝2基が検出された。竪穴住居5軒のうち2軒からは炭化材や広範囲に広がる焼土が検出されているため、焼失住居であった可能性が考えられている。第1次調査で検出した古墳周溝（南原1号墳）の延長部からの遺物の出土はなかったが、第1号円形周溝墓（南原2号墳）からは鬼高式期の甕形土器が覆土中から2点、周溝周辺からは管玉1点と赤彩された土師器坏が並べて設置された状態で2点出土した。B区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、古墳時代中期の竪穴住居3軒が検出された。竪穴住居からは和泉式期の台付甕形土器、高坏形土器が出土している。なお、2次調査B区は第8次調査、第9次調査において再調査が行われている。

第3次調査は、下水道工事事務所の資材置場建設工事に伴う緊急発掘調査としてD区、今後の宅地化に先立つ事前調査としてE区の2区にわたり、戸田市教育委員会が昭和47年2月14日から2月23日までの期間で実施した。D区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、古墳時代後期の竈をもつ竪穴住居1軒と屋外竈1基を検出した。周溝状遺構からは小型埴形土器や頸部に凸帯を有する壺形土器などが出土している。また、竪穴住居、屋外竈からは土師器坏や鞆羽口が出土している。E区からは、ピット列3列と土坑23基が検出された。これらの遺構の性格は不明であるが、第3・4・16・17号土坑からは平安時代の須恵器坏が出土している。

第4次調査は、昭和47年に戸田市教育委員会によって実施された。調査区からは古墳周溝2基（南原3号墳・4号墳）と薬研堀の溝跡1条が検出された。

第5次調査は、平成元年6月26日から9月7日までの期間で、戸田市遺跡調査会が実施した。調査区からは、古墳時代前期の竪穴住居11軒、土坑1基、周溝状遺構の可能性のある溝跡1条、中世の堀跡3条、その他時期不明の土坑1基、井戸跡1基、溝跡5条、ピット群3群を検出した。竪穴住居11軒のうち3軒からは、床面から多量の炭化物が検出されているため、焼失住居であった可能性が指摘されている。また、周溝状遺構の可能性のある溝跡からはガラス小玉が出土している。中世の堀跡は薬研状の断面形状を呈する。常滑産の甕や東播産の甕・壺などが出土していることから、13

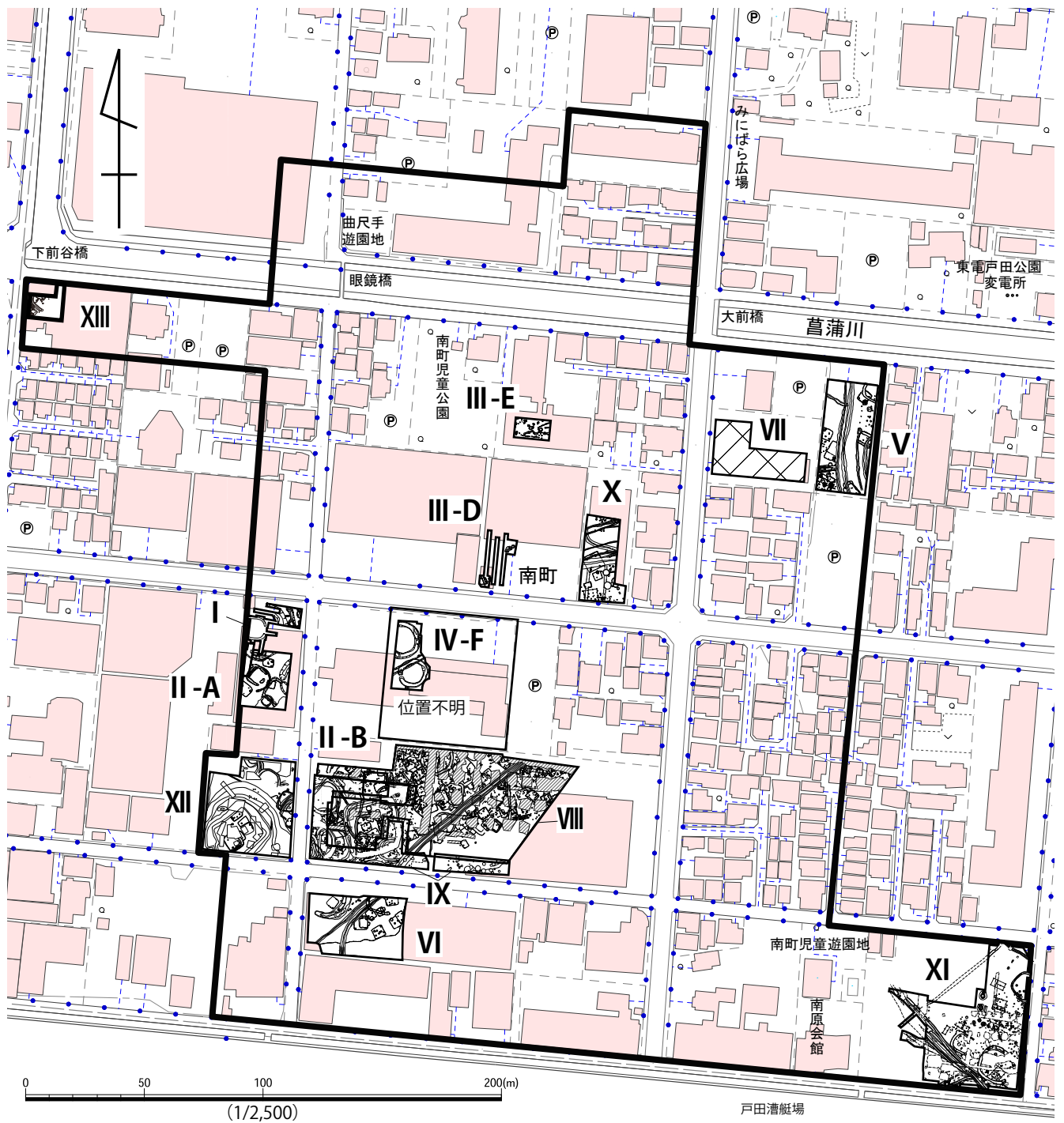




第3図 南原遺跡周辺遺跡

第1表 南原遺跡周辺遺跡の概要

NO.	遺跡名	所在地	種別	主な時代	立地
1	南原遺跡	戸田市南町	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前/後期・奈良・平安・鎌倉	自然堤防
2	前谷遺跡	戸田市上戸田2丁目	集落跡・城館跡	弥生後期・古墳前期・平安・鎌倉・南北朝・室町	自然堤防
3	鍛冶谷・新田口遺跡	戸田市上戸田3・5丁目、本町3丁目、大字新曾	集落跡	弥生後期・古墳前期	自然堤防
4	大前遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡	古墳前期・平安・南北朝・室町	自然堤防
5	上戸田本村遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡・円墳	古墳後期	自然堤防
6	南町遺跡	戸田市南町	集落跡	古墳前期	自然堤防



- I 第1次調査(1969) : 戸田市教育委員会調査(塩野ほか 1969)
- II 第2次調査(1970) : 戸田市教育委員会調査(塩野ほか 1972)
- III 第3次調査(1972) : 戸田市教育委員会調査(塩野ほか 1972)
- IV 第4次調査(1972) : 戸田市教育委員会調査(塩野ほか 1981)
- V 第5次調査(1989) : 戸田市遺跡調査会調査(小島 1991)
- VI 第6次調査(1992) : 戸田市遺跡調査会調査(小島 1996)
- VII 第7次調査(2003) : 戸田市遺跡調査会調査(未報告)

- VIII 第8次調査(2008) : 戸田市教育委員会調査(未報告)
- IX 第9次調査(2009) : 戸田市教育委員会調査(早田ほか 2010)
- X 第10次調査(2011) : 財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団調査(赤熊 2012)
- XI 第11次調査(2012) : 戸田市教育委員会調査(岩井ほか 2013)
- XII 第12次調査(2013) : 戸田市教育委員会調査(未報告)
- XIII 第13次調査(2014) : 戸田市教育委員会調査(本報告)

第4図 南原遺跡調査地点

世紀後半から14世紀に帰属するものであると考えられている。

第6次調査は、倉庫建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市遺跡調査会が平成4年6月24日から8月24日までの期間で実施した。調査区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、竪穴住居8軒、古墳時代後期の古墳周溝1基（南原5号墳）、中世の溝跡1条、堀跡2条が検出された。検出された竪穴住居のうち、3軒は焼失住居である。第2号住居からは赤彩された小型埴形土器が4点出土しており、第3号住居からは頸部に凸帯を有する壺形土器が出土している。また、古墳周溝からは1,200点以上の土器片が大量に出土した。

第7次調査は、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市遺跡調査会が平成15年11月10日から平成15年12月30日までの期間で実施したが、調査成果の詳細は未報告である。

第8次調査は、共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成20年3月28日から同年7月31日までの期間で実施した。調査区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居80基以上、周溝状遺構8基以上、古墳時代後期の古墳周溝2基などが検出された。このうち、SY1（南原7号墳）からは人物埴輪、馬形埴輪、円筒埴輪などが出土しているが、調査成果の詳細は未報告である。

第9次調査は、工場建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成21年7月6日から9月30日までの期間で実施した。調査区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居28軒、周溝状遺構13基、古墳時代前期から中期の溝跡13条、井戸跡3基、古墳時代後期の古墳周溝2基、中世以降の溝跡4条などが検出された。古墳周溝は、8次調査で検出した古墳周溝2基の続き部分が検出され、1号墳（南原6号墳）からは須恵器模倣坏や壺形土器、2号墳（南原7号墳）からは人物埴輪、馬形埴輪（8次調査出土資料と同一個体）、家形埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪などが出土した。

第10次調査は、共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が平成23年10月1日から11月30日までの期間で実施した。調査区からは古墳時代中期の竪穴住居1軒、土坑2基、平安時代の竪穴住居2軒、土坑3基、溝跡1条、中近世の掘立柱建物跡1棟、土坑3基、井戸跡5基、溝跡10条、ピット66基が検出された。古墳時代中期の竪穴住居では、壁溝周辺からまとめて高坏形土器が6点出土した。また、平安時代の竪穴住居、土坑からは9世紀前半の須恵器が出土した。

第11次調査は、共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成24年9月3日から10月31日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構3基、溝跡1条、平安時代から中世の掘立柱建物跡6棟、柵列跡4列、井戸跡8基、溝跡6条、土坑31基、ピット273基、近世以降の溝跡2条を検出した。出土遺物は少なかったが、検出された周溝状遺構3基は全てが南東方向に開口部を持つなどの規則性を有している。また、井戸跡からは、13世紀から14世紀を中心とした常滑産の陶器や中国磁器などが出土した。

第12次調査は、宅地造成および分譲住宅建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成25年3月25日から6月28日まで実施したが、調査成果等の詳細は未報告である。

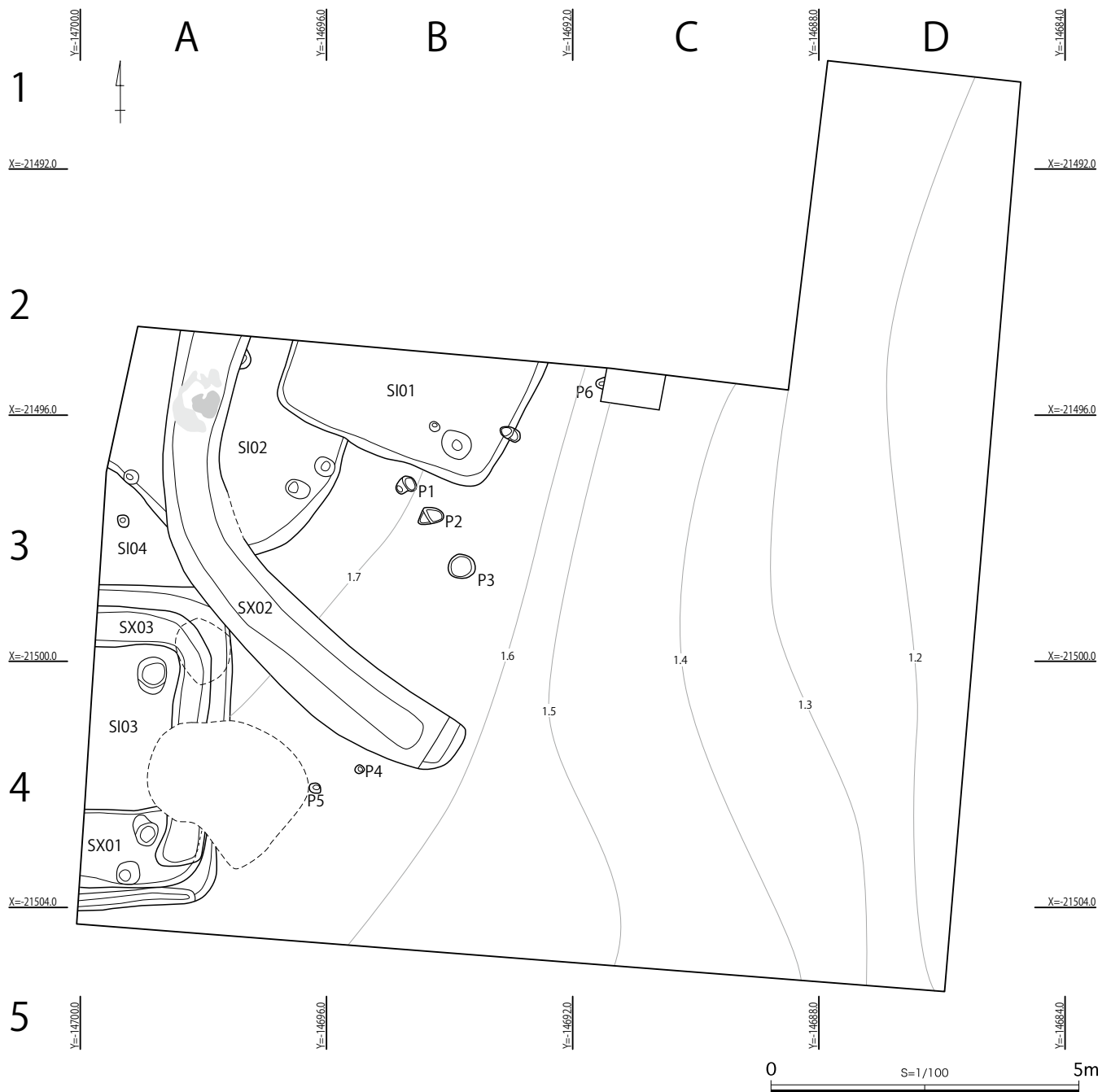
本調査は、第13次目の発掘調査となる。随所で近代以降の攪乱による削平を受けていたが、西側部分において、古墳時代前期の住居跡4基、周溝状遺構3基、ピット6基を検出した。また、これら



の遺構に伴い当該期の土師器が出土した。第1号住居跡は、床面直上にまとまって大形炭化材が出土しているため焼失住居であると考えられる。第3号住居跡と第1号周溝状遺構、第3号周溝状遺構は重複して検出され、それぞれの遺構切合い関係から第3号住居跡→第3号周溝状遺構→第1号周溝状遺構の順番で構築されたと考えられる。第1号周溝状遺構からは、比較的遺物が集中して出土した。

## 第4節 グリッドの設定

本調査では世界測地系に準拠した経緯上に、4m 正方のグリッドを設定した。グリッドの呼称については過去の報告書に従い、北西隅を基点に、東西方向をアルファベット、南北方向にアラビア数字を付し、「A-1」のように表記する。

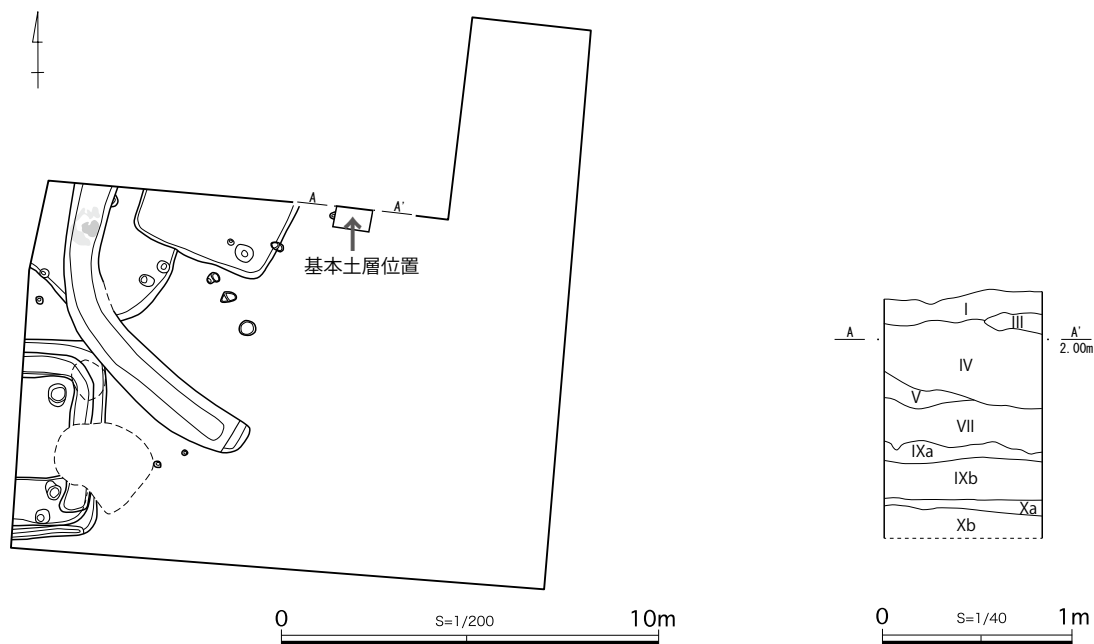


第5図 調査区全体図・等高線図 (S = 1/100)

## 第5節 地形と基本土層

基本土層は調査区北壁中央部に設定した。本遺跡は前述のように自然堤防上に立地するため、各時代の土層が砂質あるいはシルト・粘土質を主体としている。

遺構確認面は、IXa層（黄褐色粘土層）上面に設定した。確認面は基本土層位置で標高約1.5m、調査区南西角付近で約1.7m、調査区北西角付近で約1.8mを測る。今回の狭小な調査範囲内においても細かな凹凸のある微地形を有しながら東側へ傾斜する。



### 基本土層説明 A-A'

- |      |                   |   |
|------|-------------------|---|
| I.   | にぶい赤褐色土 (2.5Y4/3) | 砂質土 粘性普通、縮まりあり 炭化物 (Φ3～10mm) を部分的に微量を含む。VII層を部分的に少量含む。ガラス質粒子 (Φ<0.5mm) を全体に多量に含む (火山灰か?)。II層との間に不整合面あり。 |
| III. | にぶい赤褐色土 (2.5Y4/3) | 粘性普通、縮まりあり VII層を全体に多量に含む。ガラス質粒子を全体に含む。褐鉄鉱を全体に含む。II層からIII層の漸移層。  |
| IV.  | 灰色土 (10Y5/1)      | 粘性普通、縮まりあり 褐鉄鉱を全体に多量に含む。クラックが多く、色調が橙色となる。V層との間に不整合面あり。  |
| V.   | 灰黄褐色土 (10YR4/2)   | 砂質土 粘性あり、縮まりあり 炭化物 (Φ10mm) を部分的に少量を含む。白色粒子 (Φ0.5～2mm) を部分的に微量に含む (火山灰か?)。                               |
| VII. | 灰赤色土 (2.5Y5/2)    | 粘質土 粘性あり、縮まりあり 焼土 (Φ3～5mm) を部分的に微量を含む。炭化物 (Φ10mm) を部分的に微量に含む。マンガン (Φ3～5mm) を部分的に微量に含む。土層にクラックが入る。       |
| IXa. | にぶい黄褐色土 (10YR4/3) | 粘質土 粘性あり、縮まりあり 褐鉄鉱 (Φ3～10mm) を部分的に微量を含む。マンガン (Φ3～5mm) を部分的に微量に含む。遺構確認面。                                 |
| IXb. | 灰色土 (5Y5/1)       | 粘質土 粘性あり、縮まりあり 褐鉄鉱を部分的に含む。マンガンを部分的に少量含む。IXa層が脱色したもの。  |
| Xa.  | 明灰色土 (7.5YR5/8)   | 粘質土 粘性あり、縮まりあり 褐鉄鉱を部分的に含む。マンガンを部分的に含む。橙色味を帯びる (鉄分による汚染)。  |
| Xb.  | にぶい黄橙色土 (10YR6/3) | 粘質土 粘粘性あり、縮まりあり 褐鉄鉱を部分的に含む。マンガンを部分的に含む。やや青灰色味を帯びる。  |

第6図 基本土層 (S = 1/200・1/40)

## 第3章 遺構と出土遺物

### 第1節 住居跡

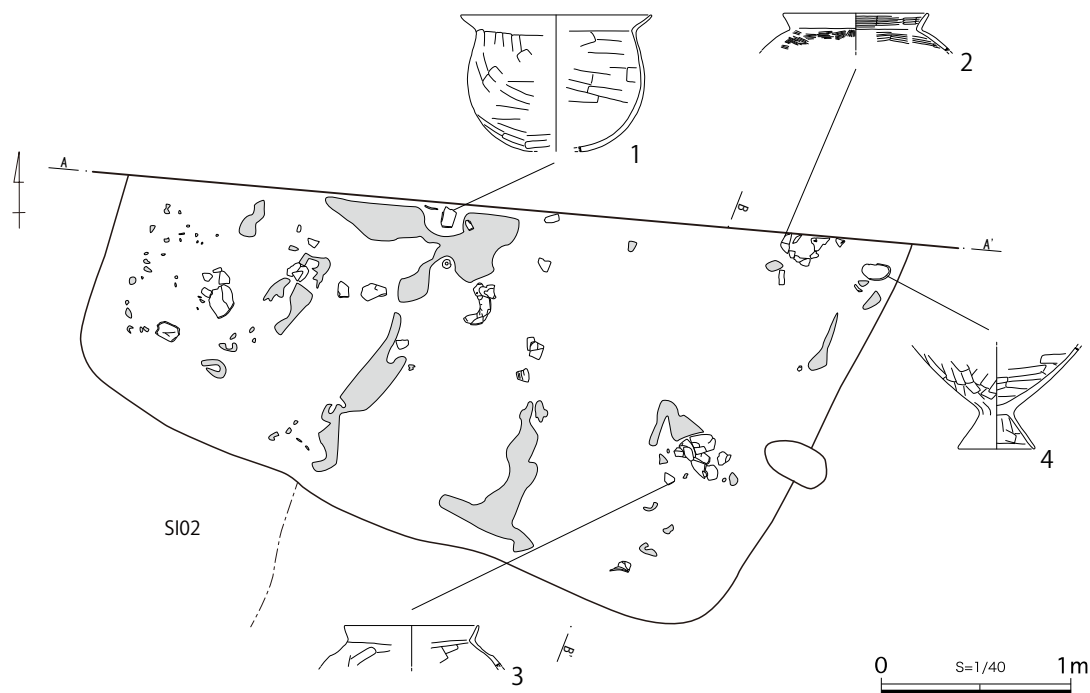
#### 第1号住居跡 -SI01

遺構 (第7～9図 図版1-2・2)

位置：A・B-2・3グリッド。重複関係：第2号住居跡を切る。主軸方位：N-68°-W。規模・形態：調査区北側において住居跡全体の1/2程度が検出された。北側は調査区外へ続く。平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。確認部分における平面規模は、北西から南東方向の一辺が3.60m、北東から南西方向の一辺が2.25m以上を測る。確認面からの深度は35cmである。覆土：21層に分層した。貼床は部分的に約10cm程の厚さで確認され、床面直上からは炭化材が土師器と共に多量に出土しているため、焼失住居であったと考えられる。住居跡内の堆積状態は自然堆積によると思われる。備考：付属施設としてピット3基(P①～P③)が確認され、P①が支柱穴の可能性がある。P②は住居跡の東側壁を切るように構築されているため、本住居跡に伴わないピットまたは住居入口施設であった可能性が考えられる。

遺物 (第10図 第2表 図版6)

出土状況：遺物は全て土師器で破片点数332点、総重量2,702gが出土した。遺物の多くは炭化材と共に床面直上から出土したものである。細片が多く、掲載は土師器4点である。1～3は甕の口縁

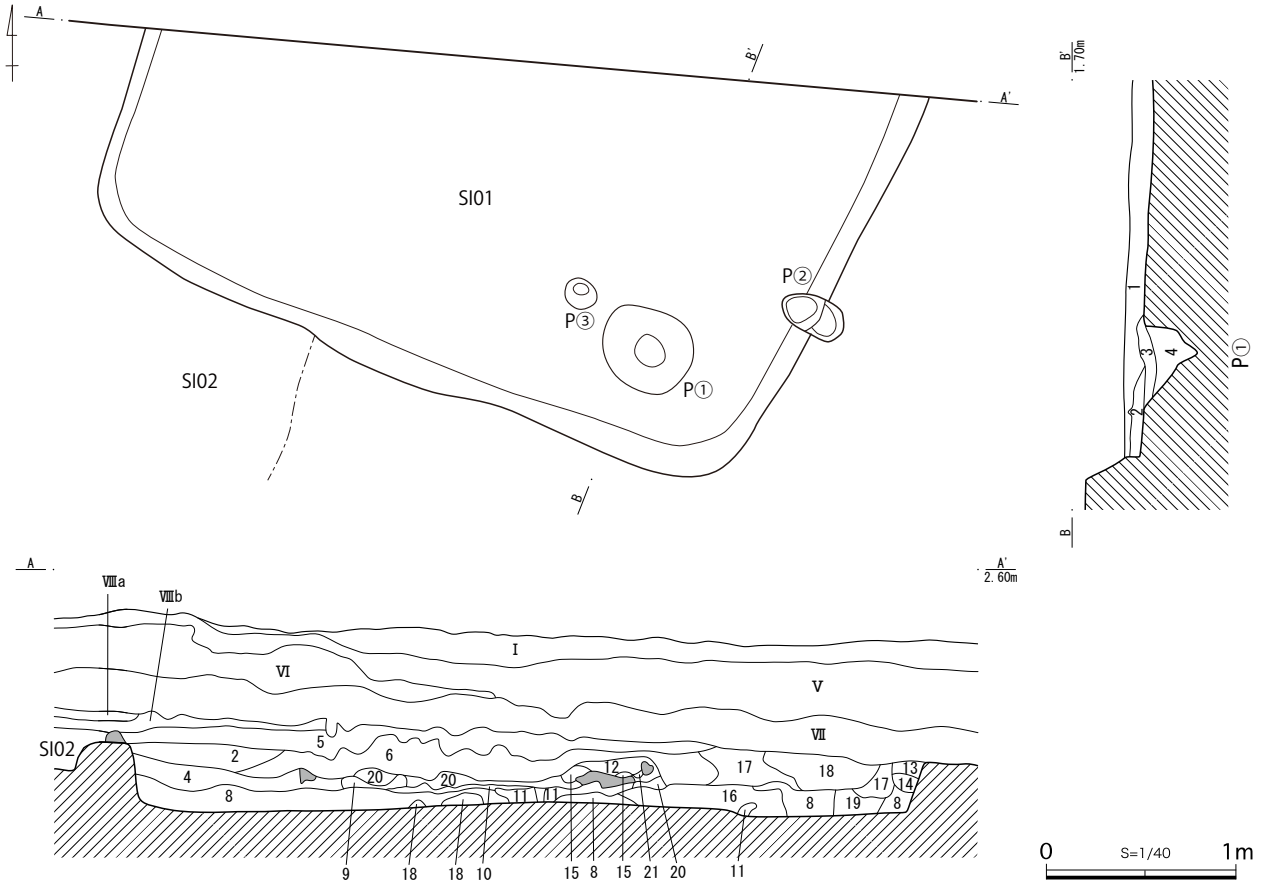


第7図 第1号住居跡炭化材・遺物出土状況図 (SI01)

部から胴部である。1と3は外面にヘラ調整を主体とする。2は口縁部内外面および体部内面にミガキ調整が施される。体部外面にはハケ調整痕も部分的に残される。2・3は台付甕の可能性も考えられる。4は台付甕の胴部下半から脚部である。

時期

出土遺物から、古墳時代前期。



第1号住居跡土層説明 A-A'

- I. にぶい赤褐色土 (2.5Y4/3) 砂質土 粘性普通、縮まりあり 炭化物 (Φ3 ~ 10 mm) を部分的に微量を含む。VII層を部分的に少量含む。
- IV. 灰色土 (10Y5/1) 粘性普通、縮まりあり 褐鉄鉱を全体に多量に含む。クラックが多く、色調が橙色となる。V層との間に不整合面あり。
- V. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 砂質土 粘性あり、縮まりあり 炭化物 (Φ10 mm) を部分的に少量を含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 2 mm) を部分的に微量に含む (火山灰か?)。
- VII. 灰赤色土 (2.5Y5/2) 粘質土 粘性あり、縮まりあり 焼土 (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量を含む。炭化物 (Φ10 mm) を部分的に微量に含む。マンガン (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量に含む。土層にクラックが入る。
- VIIIa. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、縮まりあり 白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。VII層を全体に多量に含む。VII層との漸移層。VIIIb層よりやや色調が明るい。
- VIIIb. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、縮まりあり 炭化物 (Φ5 mm) を部分的に微量に含む。VII層を部分的に少量に含む。土器包含層。
- 2. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり、縮まりあり IXa層を全体に多く含む。褐鉄鉱を全体に含む。炭化物を部分的に少量含む。焼土 (Φ4 mm) を部分的に微量に含む。
- 4. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、縮まりあり 炭化物を全体的に多量に含む。焼土を部分的に多量に含む。IXa層を全体に含む。褐鉄鉱を全体に含む。
- 5. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり、縮まりあり IXa層を全体に含む。褐鉄鉱を部分的に少量に含む。炭化物 (Φ3 mm) を部分的に微量に含む。色調赤味を帯びる。
- 6. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、縮まりあり IXa層を全体に含む。焼土 (Φ5 ~ 10 mm) 部分的に少量含む。炭化物を部分的に少量含む。褐鉄鉱を部分的に含む。三角堆積。
- 7. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、縮まりあり 炭化物を全体に多量に含む。IXa層を部分的に少量含む。焼土 (Φ10 mm) を部分的に少量含む。三角堆積。

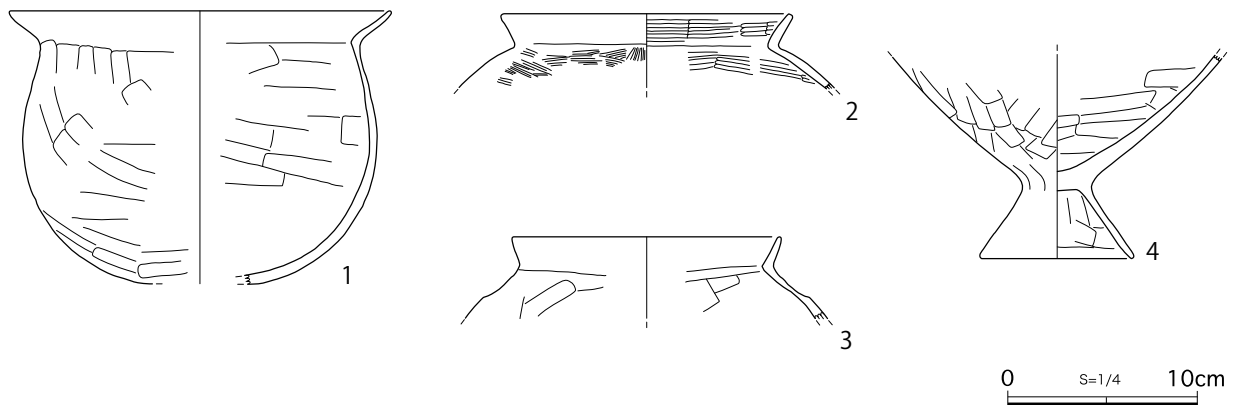
第8図 第1号住居跡実測図(1) (SI01)

- 8. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 焼土を全体に多量に含む。炭化物を部分的に含む。VIIIb層を部分的に少量含む。三角堆積。
- 9. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性あり、締まりあり IXa層を部分的に含む。褐鉄鉱を部分的に含む。焼土(Φ 3~5mm)を部分的に少量含む。
- 10. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性なし、締まりあり 炭化物少量部分的に含む。IXa層を少量部分的に含む。焼土を少量部分的に含む。
- 11. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性ややあり、締まりあり 焼土を部分的に少量含む。
- 12. 橙褐色土 (7.5YR6/8) 粘性なし、締まりあり 焼土を全体に多量に含む。
- 13. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性なし、締まりややあり 焼土を部分的に微量に含む。
- 14. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性なし、締まりあり 炭化物を部分的に微量に含む。焼土を部分的に微量に含む。
- 15. 青黒褐色土 (5B1.7/1) 粘性ややあり、締まりややあり 炭化物を全体に多量に含む。
- 16. にぶい赤褐色土 (5YR4/3) 粘性なし、締まりあり 焼土を部分的に多く含む。
- 17. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性なし、締まりあり IXa層(Φ5mm~3cm)を全体に多く含む。
- 18. 明褐色土 (7.5YR5/8) 粘性ややあり、締まりあり IXa層を全体に多く含む。
- 19. オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) 粘性なし、締まりあり IXa層を全体に少量含む。
- 20. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性なし、締まりあり IXa層を全体に少量含む。
- 21. 褐色土 (10YR4/6) 粘性ややあり、締まりあり IXa層を全体に多量に含む。

第1号住居跡土層説明 B-B'

- 1. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa層を全体に多く含む。VIIIb層を部分的に少量含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。貼り床。
- 2. にぶい橙色土 (2.5YR6/4) 粘性あり、締まりあり VIIIb層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を全体に含む。貼り床。
- 3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa層を部分的に含む。VIIIb層を部分的に少量含む。
- 4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa層を全体に含む。炭化物(Φ20mm)を部分的に微量に含む。焼土(Φ10mm)を部分的に微量に含む。VIIIb層を部分的に少量含む。

第9図 第1号住居跡実測図(2)(SI01)



第10図 第1号住居跡出土遺物実測図(SI01)

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

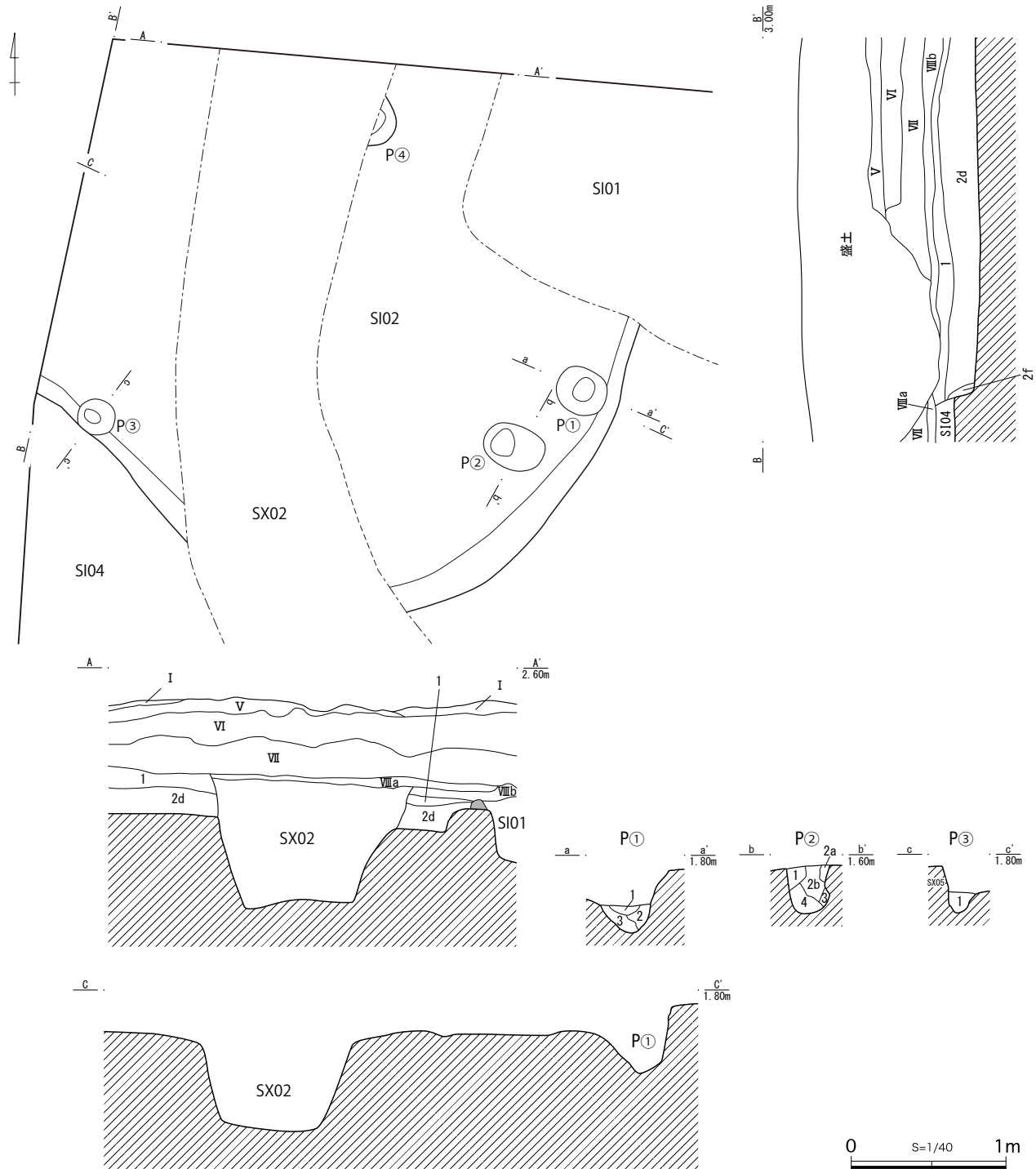
挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (推定 口径) (cm)	底径 (推定 底径) (cm)	器高 (推定 器高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
10-1 6-SI01-1	SI01	土師器	甕	口縁~ 胴部	30	(20.0)	-	<14.6	口縁内外面:横位ナデ、体部外面:縦位・ 斜位ヘラ調整、体部内面:ヘラナデ・ナデ	赤色粒・白色針 状物質・礫	良	2.5Y4/1 黄灰色	古墳前
10-2 6-SI01-2	SI01	土師器	甕	口縁部	10	(15.0)	-	<4.0	口縁内外面:ミガキ・横位ナデ、体部外面: ハケ後ナデ、体部内面:ミガキ	赤色粒・白色粒・ 雲母	良	7.5YR5/3 にぶい褐色	古墳前 外面黒色物付着
10-3 6-SI01-3	SI01	土師器	甕	口縁部	5	(14.0)	-	<4.4	口縁内外面:横位ナデ、体部外面:縦位・ 斜位ヘラ調整、体部内面:ヘラナデ・ナデ	赤色粒・白色粒・ 雲母	良	2.5Y3/1 黒褐色	古墳前 器面剥落
10-4 6-SI01-4	SI01	土師器	台付甕	脚部	20	-	(8.0)	<10.8	体部外面:縦位・斜位ヘラ調整、体部内面: ヘラナデ・ナデ、脚部外面:縦位ハケ後ナデ、 脚部内面:ヘラナデ	赤色粒・角閃石、 白色粒・雲母	良	7.5YR5/4 にぶい褐色	古墳前 裾内面に煤付着



## 第2号住居跡 -SI02

遺構 (第11・12図 図版3-1~3)

位置：A・B-2・3グリッド。重複関係：第4号住居跡を切り、第1号住居跡・第2号周溝状遺構に切られる。主軸方位：不明。規模・形態：調査区北西角で検出された。北側および西側は調査区外へ続く。平面形は不明であるが、不整円形あるいは隅丸方形の可能性はある。確認部分における平面規模は、東西方向3.68m以上、南北方向3.37m以上を測る。確認面からの深度は30cmである。覆土：



第11図 第2号住居跡実測図(1)(SI02)

3層に分層した。人為的か自然堆積かは不明。備考：付属施設としてピット4基（P①～P④）が確認されたが、明確に支柱穴と判断できるものはない。

#### 遺物（第13図 第3表 図版6）

出土状況：遺物は全て土師器で破片点数54点、総重量345gが出土した。1は甕の口縁部から胴部である。胴部にはハケ調整が施される。台付甕の可能性も考えられる。2は甕の底部である。割れ口を含め全体が摩滅している。

#### 時期

出土遺物および遺構の切合いから、古墳時代前期と推定される。

#### 第2号住居跡土層説明 A-A'

- I. にぶい赤褐色土 (2.5Y4/3) 砂質土 粘性普通、締まりあり 炭化物 (Φ3～10mm) を部分的に微量を含む。VII層を部分的に少量含む。
- V. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 砂質土 粘性あり、締まりあり 炭化物 (Φ10mm) を部分的に少量を含む。白色粒子 (Φ0.5～2mm) を部分的に微量に含む (火山灰か?)。
- VI. 灰色土 (5Y4/1) 砂質土 粘性普通、締まりあり 褐鉄鉱を全体に多量に含む。白色粒子 (Φ0.5～1mm) を部分的に微量に含む。炭化物 (Φ3～10mm) を部分的に微量に含む。土層がややグライ化している。
- VII. 灰赤色土 (2.5Y5/2) 粘質土 粘性あり、締まりあり 焼土 (Φ3～5mm) を部分的に微量を含む。炭化物 (Φ10mm) を部分的に微量に含む。マンガン (Φ3～5mm) を部分的に微量に含む。土層にクラックが入る。
- VIIIa. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 白色粒子 (Φ0.5～1mm) を部分的に微量に含む。VII層を全体に多量に含む。VII層との漸移層。VIIIb層よりやや色調が明るい。
- VIIIb. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 炭化物 (Φ5mm) を部分的に微量に含む。VII層を部分的に少量に含む。土器包含層。
  - 1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、しまり普通 褐鉄鉱を部分的に少量含む。VII層を部分的に少量含む。
  - 2d. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、しまりあり VIIIa層を全体に少量含む。褐鉄鉱を全体に少量含む。

#### 第2号住居跡土層説明 B-B'

- V. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 砂質土 粘性あり、締まりあり 炭化物 (Φ10mm) を部分的に少量を含む。白色粒子 (Φ0.5～2mm) を部分的に微量に含む (火山灰か?)。
- VI. 灰色土 (5Y4/1) 砂質土 粘性普通、締まりあり 褐鉄鉱を全体に多量に含む。白色粒子 (Φ0.5～1mm) を部分的に微量に含む。炭化物 (Φ3～10mm) を部分的に微量に含む。土層がややグライ化している。
- VII. 灰赤色土 (2.5Y5/2) 粘質土 粘性あり、締まりあり 焼土 (Φ3～5mm) を部分的に微量を含む。炭化物 (Φ10mm) を部分的に微量に含む。マンガン (Φ3～5mm) を部分的に微量に含む。土層にクラックが入る。
- VIIIa. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 白色粒子 (Φ0.5～1mm) を部分的に微量に含む。VII層を全体に多量に含む。VII層との漸移層。VIIIb層よりやや色調が明るい。
- VIIIb. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 炭化物 (Φ5mm) を部分的に微量に含む。VII層を部分的に少量に含む。土器包含層。
  - 1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、しまり普通 褐鉄鉱を部分的に少量含む。VII層を部分的に少量含む。
  - 2d. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、しまりあり VIIIa層を全体に少量含む。褐鉄鉱を全体に少量含む。
  - 2f. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、しまりあり VIIIa層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を全体に含む。

#### 第2号住居跡P①土層説明 a-a'

- 1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa層を部分的に少量に含む。褐鉄鉱を部分的に微量に含む。
- 2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa層を全体に含む。褐鉄鉱を全体に含む。
- 3. 黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり、締まりあり IXa・IXb層を全体に多く含む。褐鉄鉱を部分的に含む。

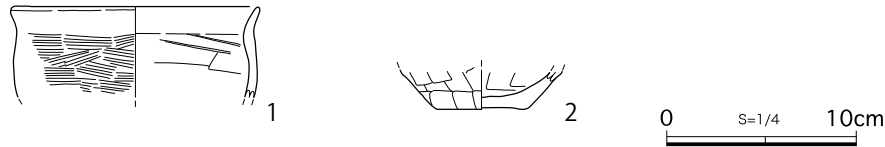
#### 第2号住居跡P②土層説明 b-b'

- 1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa層を全体に多量に含む。IXb層を部分的に少量に含む。
- 2a. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa層を部分的に多く含む。IXb層を部分的に少量含む。
- 2b. 暗褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、締まりあり IXa層を全体に含む。IXb層を全体に微量に含む。
- 3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa層を全体に含む。IXb層を全体に微量に含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。
- 4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa層を部分的に含む。IXb層を全体に多く含む。褐鉄鉱を全体に含む。

#### 第2号住居跡P③土層説明 c-c'

- 1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa・IXb層を部分的に少量含む。褐鉄鉱を部分的に微量に含む。

### 第12図 第2号住居跡実測図(2) (SI02)



第 13 図 第 2 号住居跡出土遺物実測図 (SI02)

第 3 表 第 2 号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (推定 口径) (cm)	底径 (推定 底径) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
13-1 6-SI02-1	SI02	土師器	甕	口縁～ 胴部	5	(13.0)	-	<4.8>	口縁内外面：横位ナデ、体部外面：横位・ 斜位ハケ調整、体部内面：ヘラナデ	長石・雲母・褐色 粒	良	10YR3/4 にぶい黄褐色	古墳前
13-2 6-SI02-2	SI02	土師器	甕	底部	5	-	(5.0)	<2.1>	外面：ヘラナデ、内面：ヘラナデ	角閃石、白色粒	良	10YR6/2 にぶい黄褐色	古墳前

### 第 3 号住居跡 -SI03

遺構 (第 14・15 図 図版 3-4・5、4-1・2)

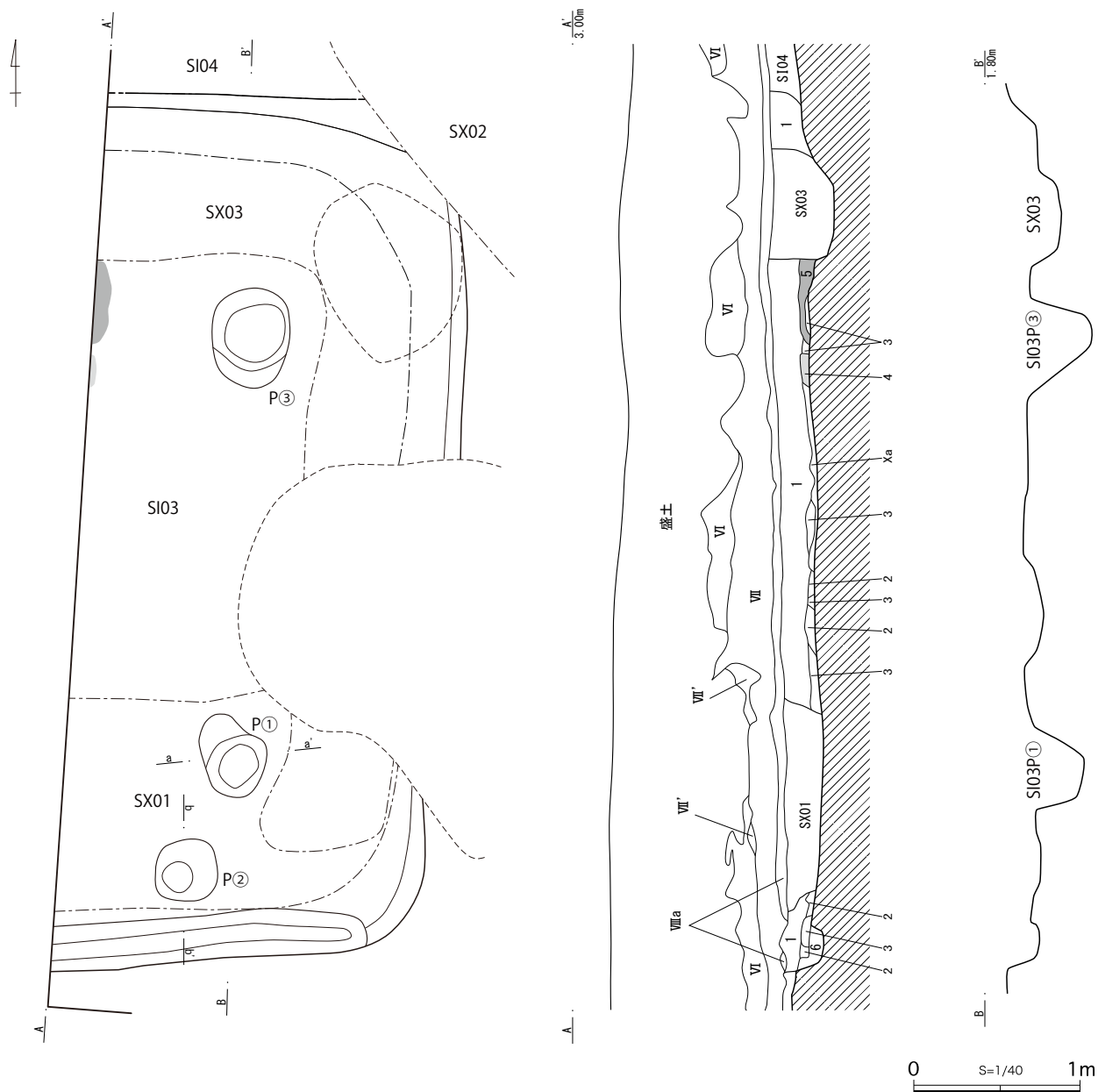
位置：A-3・4 グリッド。重複関係：第 1 号周溝状遺構、第 2 号周溝状遺構、第 3 号周溝状遺構に切られる。主軸方位：N-3°-E。規模・形態：検出部分は住居跡全体の約 1/3 程度と思われ、西側調査区外へ続く。平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。確認部分における平面規模は、南北方向 5.00m、東西方向 2.15m 以上を測る。確認面からの深度は 22 cm である。覆土：5 層に分層した。2 層の貼床は部分的に約 7 cm 程の厚さで確認された。備考：付属施設として炉跡、壁溝とピット 3 基 (P ①～P ③) が確認された。炉跡は西壁付近で検出され、調査区外へ続く部分に主体が存在するものと推定される。P ①・P ③は支柱穴の可能性はある。

遺物 (第 16 図 第 4 表 図版 6)

出土状況：遺物は全て土師器で破片点数 58 点、総重量 523g が出土した。覆土中から出土した 2 点を図示した。1 は完形に近い鉢である。器高は 5.4 cm と低く、底部に直径 3.2 cm の凹みを有する。2 も底部に直径 3.0 cm の凹みを有するが、器形は鉢状を呈すると考えられるため鉢と推定した。

時期

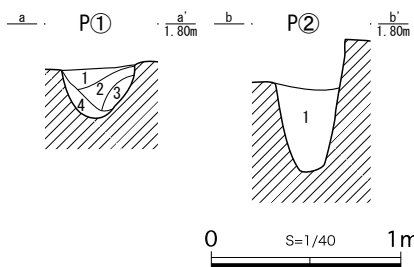
出土遺物から、古墳時代前期。



第3号住居跡土層説明 A-A'

- |  |  |
|--|--|
| <p>VI. 灰色土 (5Y4/1)</p> <p>VII. 灰赤色土 (2.5Y5/2)</p> <p>VII'. 灰赤色土 (2.5Y5/2)</p> <p>VIIIa. 暗褐色土 (10YR3/3)</p> <p>Xa. 明灰色土 (7.5YR5/8)</p> <p>1. 黒褐色土 (10YR2/3)</p> <p>2. 暗褐色土 (10YR3/3)</p> <p>3. 暗褐色土 (10YR3/3)</p> <p>4. にぶい赤褐色土 (5YR4/4)</p> <p>5. 黒色土 (10YR1.7/1)</p> <p>6. 暗褐色土 (10YR3/3)</p> | <p>砂質土 粘性普通、締まりあり 褐鉄鉱を全体に多量に含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。炭化物 (Φ3 ~ 10 mm) を部分的に微量に含む。土層がややグライ化している。</p> <p>粘質土 粘性あり、締まりあり 焼土 (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量を含む。炭化物 (Φ10 mm) を部分的に微量に含む。マンガン (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量に含む。土層にクラックが入る。</p> <p>粘質土 粘性あり、締まりあり 焼土 (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量を含む。炭化物 (Φ10 mm) を部分的に微量に含む。マンガン (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量に含む。</p> <p>粘性あり、締まりあり 白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。VII層を全体に多量に含む。VII層との漸移層。VIIIb層よりやや色調が明るい。</p> <p>粘質土 粘性あり、締まりあり 褐鉄鉱を部分的に含む。マンガンを部分的に含む。橙色味を帯びる (鉄分による汚染)。</p> <p>粘性あり、締まりあり VIIIb層を全体に含む。焼土 (Φ1 ~ 5 mm) を全体に少量含む。褐鉄鉱を全体に少量含む。</p> <p>粘性あり、締まりあり VIIIb層を中心としてIXa層を全体に含む。貼り床。</p> <p>粘性あり、締まりあり IXa層を全体に多量に含む (色調が黄色味を帯びる)。褐鉄鉱を部分的に少量含む。貼り床。</p> <p>粘性あり、締まりあり 焼土を全体に多量に含む。焼成が強い。地床炉。</p> <p>粘性あり、締まりあり 炭化物を全体に多量に含む。炭化物集中地点。</p> <p>粘性あり、締まりあり IXa層を全体に含む。VIIIb層を部分的に少量含む。</p> |
|--|--|

第14図 第3号住居跡実測図 (1) (SI03)



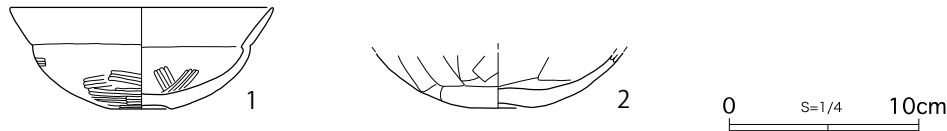
第3号周溝状遺構 P① a-a'

1. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘性ややなし、縮まりややあり Ixa層を全体に微量に含む。
2. にぶい橙褐色土 (7.5YR6/4) 粘性ややあり、縮まりややなし Ixa層を全体に少量含む。
3. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性ややあり、縮まりややあり Ixa層を全体に少量含む。
4. 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性ややあり、縮まりややあり Ixa層を全体に少量含む。

第3号周溝状遺構 P② b-b'

1. 極暗褐色土質土 (7.5YR2/3) 粘性ややなし、縮まりややあり Ixa層を全体に微量に含む

第15図 第3号住居跡実測図(2) (SI03)



第16図 第3号住居跡出土遺物実測図 (SI03)

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (推定 口径) (cm)	底径 (推定 底径) (cm)	器高 (推定 残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
16-1 6-SI03-1	SI03	土師器	鉢	口縁～ 底部	80	(13.8)	3.2	5.4	口縁内外面：横位ナデ、体内内外面： ミガキ	赤色粒・白色針状 物質・雲母・礫	良	2.5Y4/2 暗灰黄色	古墳前
16-2 6-SI03-2	SI03	土師器	鉢	底部	10	-	3.0	<2.8>	外面：ミガキ・ヘラナデ、内面：ヘラ ナデ	赤色粒・礫	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	古墳前

## 第4号住居跡 -SI04

遺構 (第17図 図版4-3)

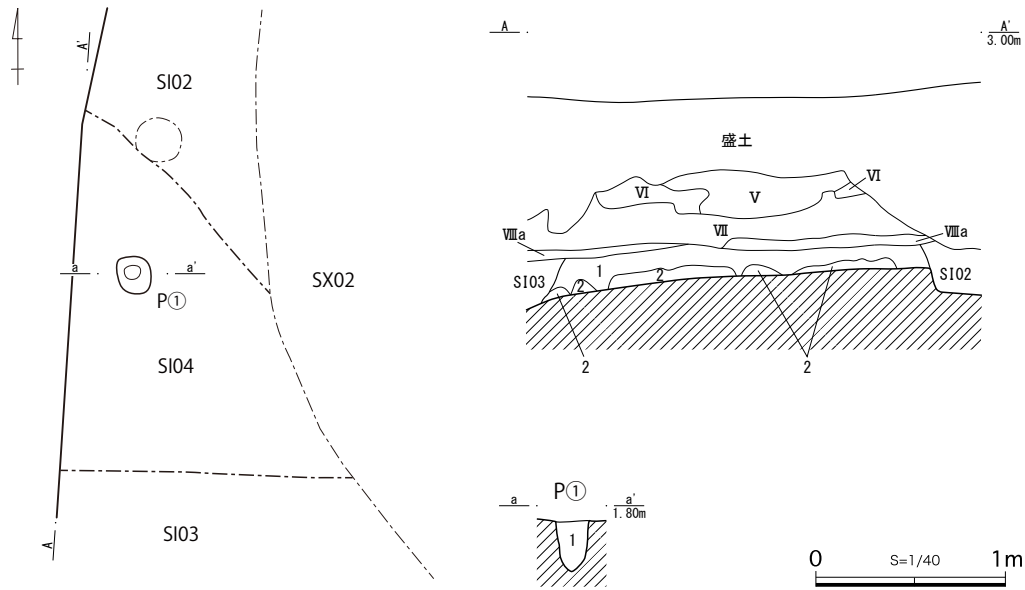
位置：A-3グリッド。重複関係：第2号住居跡、第3号住居跡、第2号周溝状遺構に切られる。  
 主軸方位：不明。規模・形態：検出部分に本遺構の縁辺部はないが、貼床状の覆土の存在から住居跡  
 と判断した。確認面からの深度は18cmである。覆土：2層に分層した。人為的か自然堆積かは不明。  
 2層は第3号住居跡の貼床部分に似る。備考：付属施設としてピット1基 (P①) が確認される。P  
 ①は支柱穴の可能性はある。

遺物 (第18図 第5表 図版6)

出土状況：遺物は全て土師器で破片点数54点、総重量345gが出土した。1は器台である。受け  
 部中央に推定直径7mmの焼成前穿孔が穿たれる。2は甕の底部である。1・2どちらも破断面を含め  
 た全体が摩滅している。

時期

重複遺構の切合い関係から、古墳時代前期と推定される。



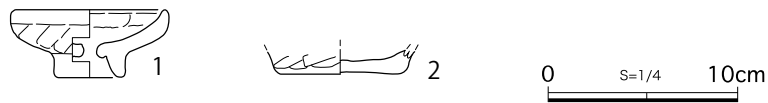
第4号住居跡土層説明 A-A'

- V. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 砂質土 粘性あり、締まりあり 炭化物 (Φ10 mm) を部分的に少量を含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 2 mm) を部分的に微量に含む (火山灰か?)。
- VI. 灰色土 (5Y4/1) 砂質土 粘性普通、締まりあり 褐鉄鉱を全体に多量に含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。炭化物 (Φ3 ~ 10 mm) を部分的に微量に含む。土層がややグライ化している。
- VII. 灰赤色土 (2.5Y5/2) 粘質土 粘性あり、締まりあり 焼土 (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量を含む。炭化物 (Φ10 mm) を部分的に微量に含む。マンガン (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量に含む。土層にクラックが入る。
- VIIIa. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。VII層を全体に多量に含む。VII層との漸移層。VIIIb層よりやや色調が明るい。
  - 1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり 褐鉄鉱を全体に含む。
  - 2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa層を全体に多く含む。焼土 (Φ3 mm) を部分的に微量に含む。

第4号住居跡P①土層説明 a-a'

- 1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa層を全体に多く含む。焼土 (Φ3 mm) を部分的に微量に含む。

第17図 第4号住居跡実測図 (SI04)



第18図 第4号住居跡出土遺物実測図 (SI04)

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (推定 口径) (cm)	底径 (推定 底径) (cm)	器高 (推定 残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
18-1 6-SI04-1	SI03	土師器	器台	口縁~ 底部	40	(8.0)	(3.6)	3.6	内外面：ヘラナデ	赤色粒・雲母	良	7.5YR6/4 にぶい橙色	古墳前
18-2 6-SI04-2	SI03	土師器	甕	底部	5	-	(6.8)	<2.3>	内外面：ヘラナデ	長石・赤色粒	良	10YR6/3 にぶい黄橙色	古墳前

## 第2節 周溝状遺構

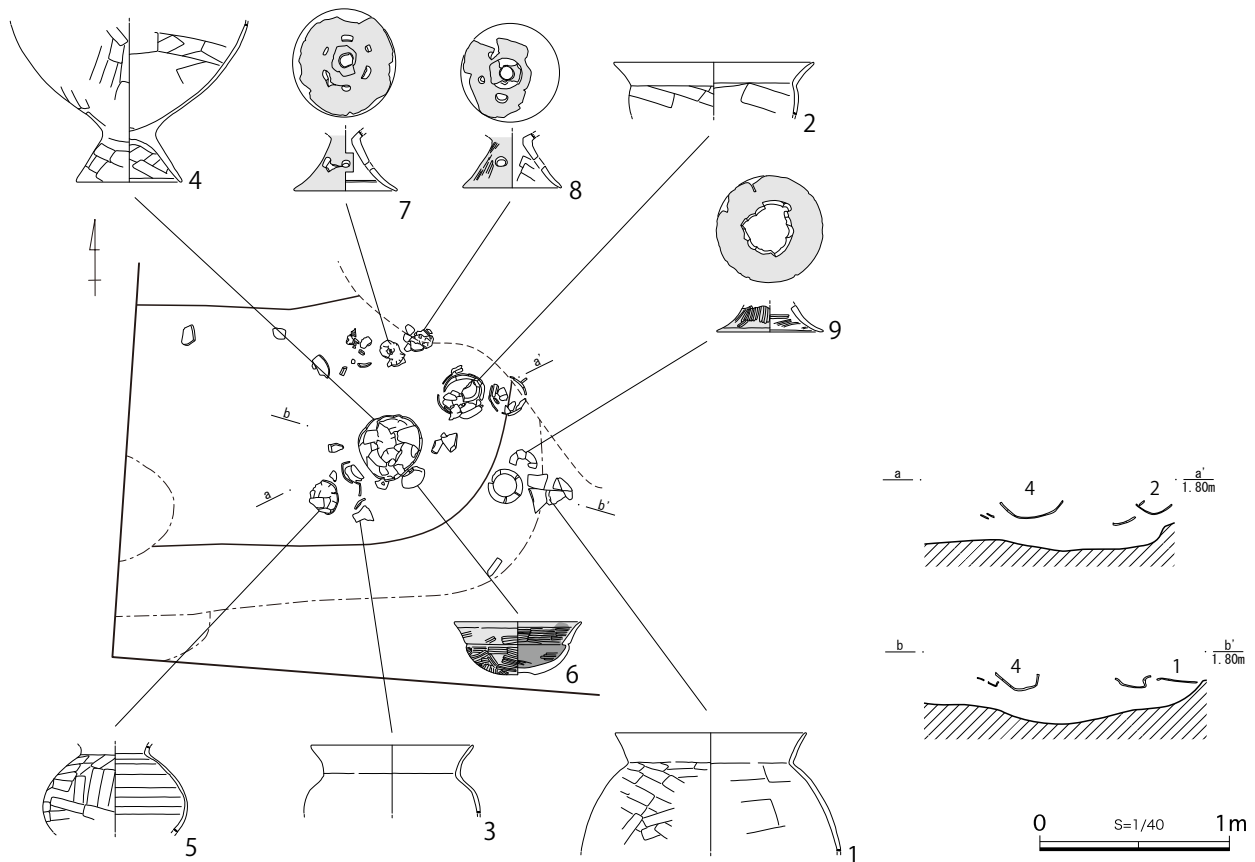
### 第1号周溝状遺構 -SX01

遺構 (第19・20図 図版4-4・5、5-1)

位置：A-4グリッド。重複関係：第3号住居跡、第3号周溝状遺構を切る。主軸方位：不明。規模・形態：西壁で調査区外へ続く。検出部分での平面規模は、長さ（東西方向）1.90m、幅（南北方向）1.35mを測る。断面形は浅い皿形を呈し、確認面からの深度は24cmである。覆土：3層に分層した。人為的か自然堆積かは不明。備考：本遺構は遺構形状、遺物出土状況、切り合い関係から単独の「周溝状遺構」として報告するが、SIO3建替えの際の掘り方であった可能性がある。また、SX03と同一遺構である可能性がある。

遺物 (第21図 第6表 図版7)

出土状況：遺物は全て土師器で破片点数327点、総重量2,879gが出土した。本遺構の遺物は遺構底面から15cm程浮いた状態でまとまって出土している。出土状況から、遺物の一括投棄が推定される。掲載は土師器9点である。1～3は甕の口縁部から胴部である。1・2はヘラナデ調整を主体とする。3は器面剥落のため調整は不明瞭である。4は台付甕の胴部下半から脚部で、1と同一個体の可能性がある。5は小型の壺で、内面に輪積痕が明瞭に残る。6はほぼ完形に近い鉢である。器高は5.6cm

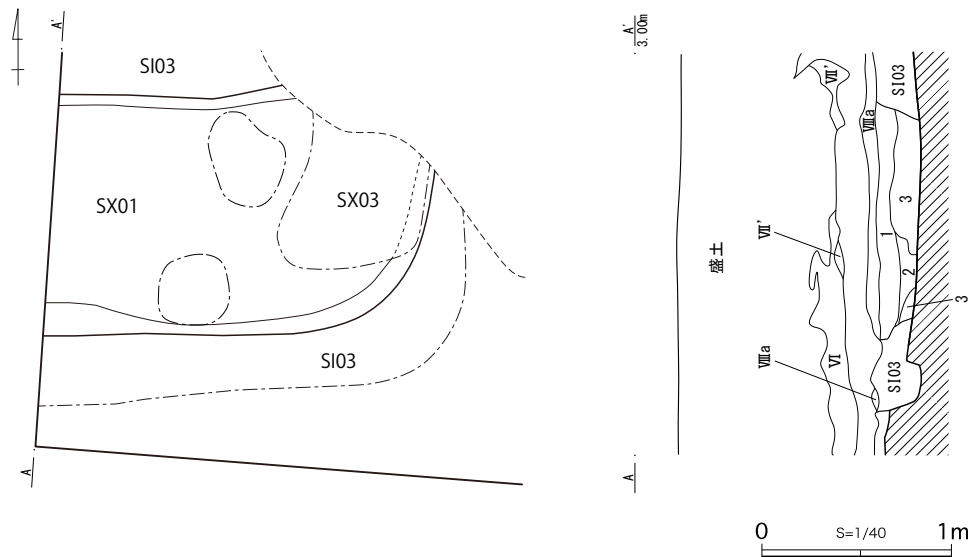


第19図 第1号周溝状遺構遺物出土状況図 (SX01)

と低く、底部に直径 3.6 cmの凹みを有する。口縁部内面から外面に赤彩が施される。内面に煤の付着が認められる。7・8は器台である。7の脚部には、高低交互に6箇所透孔が穿たれる。8は脚部に透孔が4箇所残存する。9は高杯脚部としたが、器台の可能性もある。脚部に透孔が4箇所確認される。7～9は外面に赤彩が施される。

時期

出土遺物から、古墳時代前期。

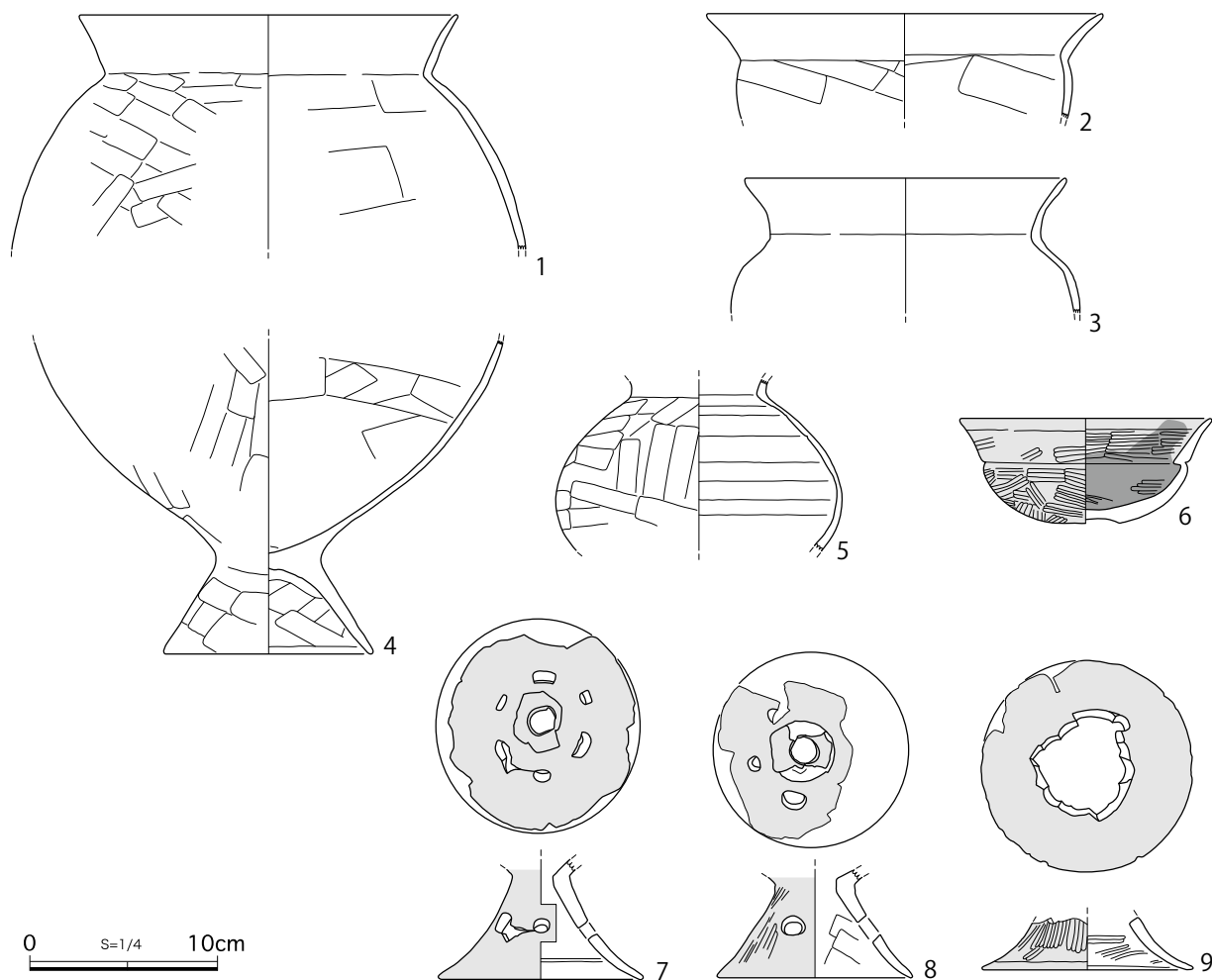


第1号周溝状遺構土層説明 A-A'

- VI. 灰色土 (5Y4/1) 砂質土 粘性普通、締まりあり 褐鉄鉱を全体に多量に含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。炭化物 (Φ3 ~ 10 mm) を部分的に微量に含む。土層がややグライ化している。
- VII. 灰赤色土 (2.5Y5/2) 粘質土 粘性あり、締まりあり 焼土(Φ3 ~ 5 mm)を部分的に微量を含む。炭化物(Φ10 mm)を部分的に微量に含む。マンガン (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量に含む。
- VIIIa. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 白色粒子(Φ0.5 ~ 1 mm)を部分的に微量に含む。VII層を全体に多量に含む。VII層との漸移層。VIIIb層よりやや色調が明るい。
- 1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa層を全体に多く含む。VIIIb層を部分的に少量に含む。灰(Φ0.5 ~ 1 mm)を部分的に微量に含む。VIIIb層由来?。土器を部分的に含む。
- 2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり VII層を部分的に含む。VIIIb層を部分的に少量に含む。白色粒子を部分的に微量に含む。1層より暗色味を帯びる。
- 3. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり、締まりあり VIIIa層を全体に多く含む。VIIIb層を全体に多く含む。白色粒子を部分的に少量含む。

第20図 第1号周溝状遺構実測図 (SX01)





第 21 図 第 1 号周溝状遺構出土遺物実測図 (SX01)

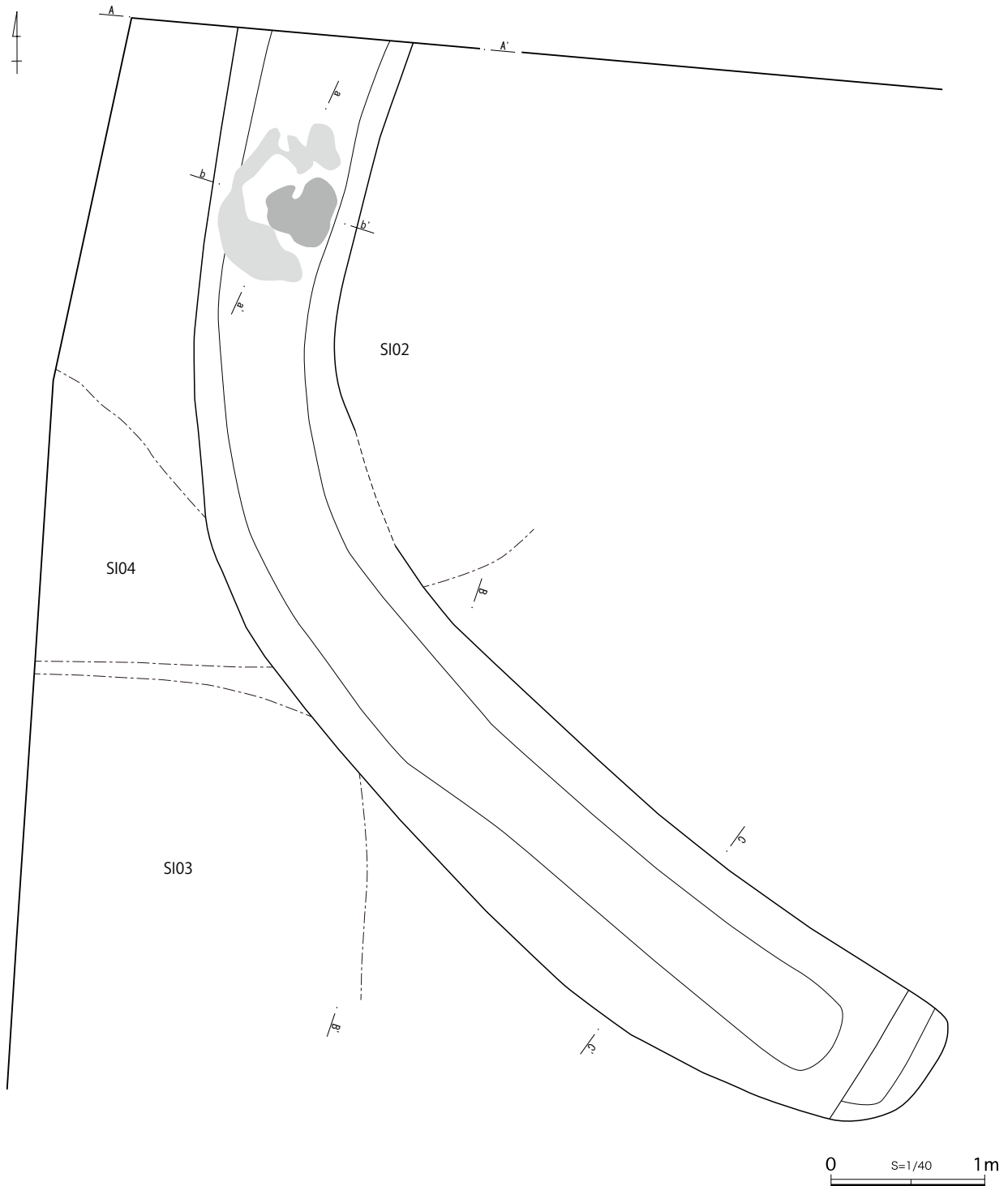
第 6 表 第 1 号周溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (推定 口径) (cm)	底径 (推定 底径) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
21-1 7-SX01-1	SX01	土師器	甕	口縁～ 胴部	20	(20.0)	-	<12.6>	口縁内外面：横位ナデ、体部外面：縦位・斜位 ヘラ調整、体部内面：ヘラナデ・ナデ	赤色粒・角 閃石	良	2.5Y6/3 にぶい黄色	古墳前 4 と同一個体の 可能性
21-2 7-SX01-2	SX01	土師器	甕	口縁部	10	(21.0)	-	<5.6>	口縁内外面：横位ナデ、体部外面：斜位ヘラ調 整、体部内面：ヘラナデ・ナデ	赤色粒	良	5YR6/6 橙色	古墳前 器面摩耗
21-3 7-SX01-3	SX01	土師器	甕	口縁部	20	(17.0)	-	<7.2>	口縁内外面：横位ナデ、体部外面：ハケ後ナデ、 体部内面：ヘラナデ・ナデ	赤色粒・角 閃石	良	5YR6/4 にぶい橙色	古墳前 器面剥落
21-4 7-SX01-4	SX01	土師器	台付 甕	胴部～ 脚部	40	-	11.0	<16.8>	甕部外面：縦位・斜位ヘラ調整、甕部内面：ヘ ラナデ・ナデ、脚部内外面：ヘラナデ・ナデ	赤色粒・角 閃石	良	2.5Y6/3 にぶい黄色	古墳前 1 と同一個体の 可能性
21-5 7-SX01-5	SX01	土師器	壺	頸部～ 胴部	50	-	-	<9.2>	体部外面：ハケ後ナデ、体部内面：ナデ	赤色粒・角 閃石・白色 針状物質	良	7.5YR5/4 にぶい褐色	古墳前 内面輪積痕瞭
21-6 7-SX01-6	SX01	土師器	鉢	ほぼ 完形	95	13.4	3.6	5.6	口縁部内外面：横位ミガキ・ナデ、体部内外面： ミガキ、口縁内面～外面赤彩	赤色粒・角 閃石	良	7.5YR5/3 にぶい褐色	古墳前 内面煤付着
21-7 7-SX01-7	SX01	土師器	器台	脚部	70	-	(10.6)	<6.4>	外面：縦位ミガキ、内面：ナデ、裾部内外面： 横位ナデ、外面赤彩、脚部透孔 6 箇所	赤色粒・角 閃石・礫	良	5YR5/4 にぶい赤褐色	古墳前
21-8 7-SX01-8	SX01	土師器	器台	脚部	60	-	(10.2)	<5.8>	外面：縦位ミガキ、内面：ヘラナデ・ナデ、外 面赤彩、脚部透孔 4 箇所残	赤色粒・角 閃石	良	5YR5/4 にぶい赤褐色	古墳前
21-9 7-SX01-9	SX01	土師器	高杯	脚部	30	-	11.0	<2.8>	外面：縦位ミガキ、内面：ハケ後ナデ、裾部内 外面：横位ナデ、外面赤彩、脚部透孔 4 箇所	赤色粒・角 閃石	良	5YR6/3 にぶい橙色	古墳前

## 第2号周溝状遺構 -SX02

遺構 (第22～25図 図版5-2～4)

位置：A・B-2～4グリッド。重複関係：第2号住居跡、第3号住居跡、第4号住居跡を切る。  
主軸方位：主軸方位：N-42°-E。規模・形態：検出部分での平面規模は、長さ7.72m以上、幅1.15mを測る。北側は調査区外へ続く。確認面からの深度は北側で85cm、中央部で89cm、南側で75cmである。断面形は逆台形を呈する。覆土：16層に分層した。遺構内の堆積状況は自然堆積によると思われる。



第22図 第2号周溝状遺構実測図(1)(SX02)

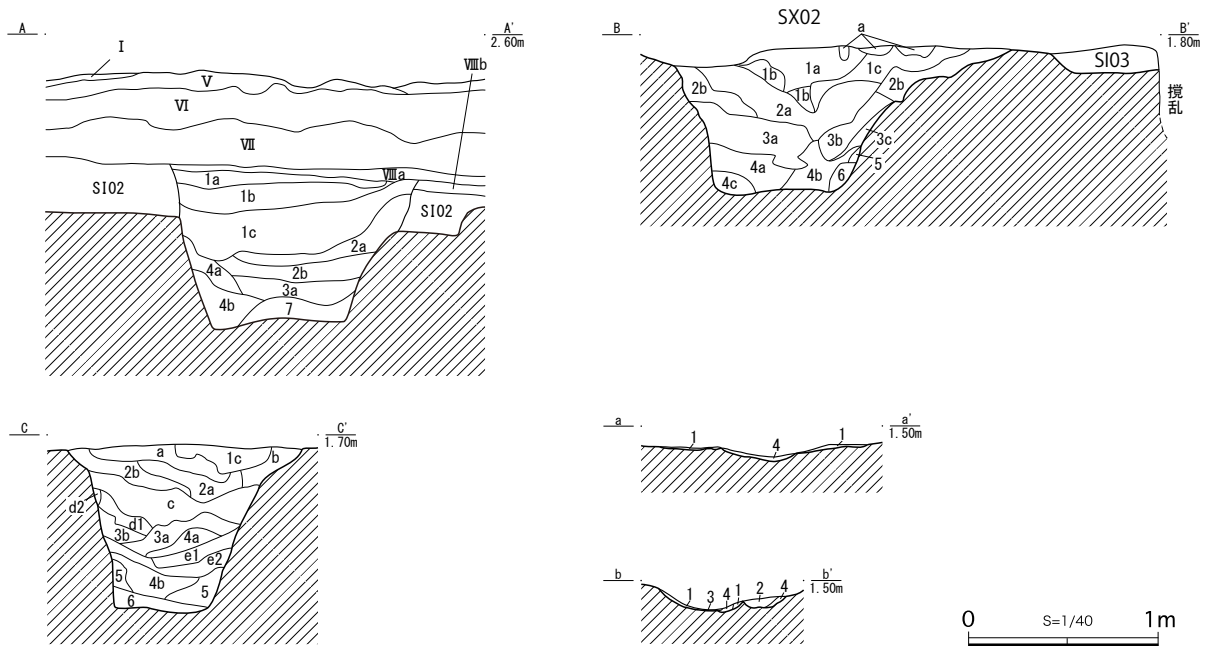
備考：付属施設として本遺構と直接関係するものではないと考えるが、北側の覆土中位において、炉跡に類似した焼土と炭化物の集中箇所が検出されている。

遺物（第 26 図 第 7 表 図版 7）

出土状況：遺物は全て土師器で破片点数 90 点、総重量 735g が出土した。1 は甕の底部である。外面に縦位のヘラ調整が施される。2 は壺である。複合口縁を有し、外面から口縁内面に赤彩が施される。

時期

出土遺物から、古墳時代前期。



第 2 号周溝状遺構土層説明 A-A'

- I. にぶい赤褐色土 (2.5Y4/3) 砂質土 粘性普通、締まりあり 炭化物 (Φ3 ~ 10 mm) を部分的に微量を含む。VII 層を部分的に少量含む。
- V. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 砂質土 粘性あり、締まりあり 炭化物 (Φ10 mm) を部分的に少量を含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 2 mm) を部分的に微量に含む (火山灰か?)。
- VI. 灰色土 (5Y4/1) 砂質土 粘性普通、締まりあり 褐鉄鉱を全体に多量に含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。炭化物 (Φ3 ~ 10 mm) を部分的に微量に含む。土層がややグライ化している。
- VII. 灰赤色土 (2.5Y5/2) 粘質土粘性あり、締まりあり 焼土 (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量を含む。炭化物 (Φ10 mm) を部分的に微量に含む。マンガン (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量に含む。土層にクラックが入る。
- VIIIa. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。VII 層を全体に多量に含む。VII 層との漸移層。VIIIb 層よりやや色調が明るい。
- VIIIb. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 炭化物 (Φ5 mm) を部分的に微量に含む。VII 層を部分的に少量に含む。土器包含層。
- 1a. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 白色粒子 (Φ0.5 ~ 5 mm) を部分的に微量に含む (テフラ?)。VIII a 層を部分的に微量に含む。S102 より新。
- 1b. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 褐鉄鉱を全体に含む。IXa 層を部分的に少量含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 3 mm) を部分的に微量に含む。1a 層より粗粒。
- 1c. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、締まりあり IXa 層を全体に含む。褐鉄鉱を全体に含む。IXa 層があるため 1b 層より明色。
- 2a. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、締まりあり IXa 層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を全体に含む。1b 層より明色。
- 2b. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、締まりあり IXa 層を全体に多量に含む。2a 層より暗色。
- 3a. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa 層を全体的に多量に含む。VIIIb 層を全体的に多量に含む。褐鉄鉱を部分的に微量に含む。VIIIb 層より明色。

第 23 図 第 2 号周溝状遺構実測図 (2) (SX02)

- 4a. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa・VIIIb 層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。
- 4b. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa 層を全体的に多量に含む。VIIIb 層を全体的に多量に含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。4a より明色である。
- 7. 褐灰色土 (7.5YR4/1) IXb 層を全体に多量に含む。IXa 層を全体に多く含む。褐鉄鉱を部分的に多く含む。グライ化土層で帯水層、クラックが入る。

第2号周溝状遺構土層説明 B-B'

- a. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXb 層を全体に含む。褐鉄鉱を全体に少量含む。IXb 層を部分的に少量含む。
- 1a. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり 白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を全体に少量含む。IXb 層を部分的に少量含む。
- 1b. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa 層を全体に多く含む。IXb 層を部分的に少量含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量含む。
- 1c. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa 層を全体に多量に含む。IXb 層を部分的に多く含む。褐鉄鉱を部分的に含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。色調が明るい。
- 2a. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa・IXb 層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を全体に含む。白色粒子 (Φ0.5 mm) を部分的に微量に含む。
- 2b. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa・IXb 層を全体に多量に含む (2a 層よりは量は少ない)。
- 3a. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa 層を全体的に多量に含む。VIIIb 層を全体的に多量に含む。褐鉄鉱を部分的に微量に含む。VIIIb 層より明色。
- 3b. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり、締まりあり VIIIa・VIIIb 層を全体に多く含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。
- 3c. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、締まりあり 焼土 (Φ1 ~ 20 mm) を全体に含む。VIIIa 層を部分的に少量含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を全体に少量含む。褐鉄鉱を全体に含む。
- 4a. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa・VIIIb 層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。
- 4b. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa 層を全体的に多量に含む。VIIIb 層を全体的に多量に含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。4a より明色である。
- 4c. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa・VIIIb 層を全体的に多量に含む (4a 層より少ない)。褐鉄鉱を部分的に少量含む。
- 5. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIb 層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を少量含む。
- 6. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIb 層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を少量含む。流れ込み。

第2号周溝状遺構土層説明 C-C'

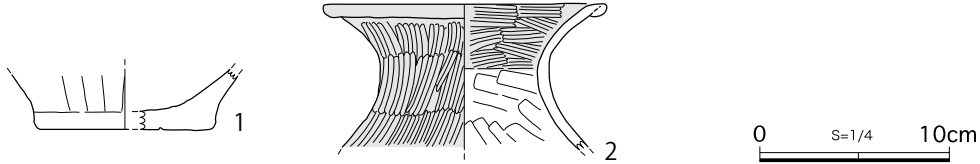
- a. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり 白色粒子を部分的に含む。VIIIa 層 (Φ0.5 ~ 1 mm) を全体的に少量に含む。褐鉄鉱を部分的に含む。
- b. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa 層を全体に含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。
- c. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa 層を全体に含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。
- 1c. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa 層を全体に多量に含む。IXb 層を部分的に多く含む。褐鉄鉱を部分的に含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。色調が明るい。
- 2a. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa・IXb 層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を全体に含む。白色粒子 (Φ0.5 mm) を部分的に微量に含む。
- 2b. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり IXa・IXb 層を全体に多量に含む (2a 層よりは量は少ない)。
- d1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa 層を全体に含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。d1 層より暗色。
- d2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa 層を全体に含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。d1 層より暗色。
- e1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり VIIIb 層を全体に多量に含む。黒褐色土 (10YR3/2) を部分的に含む。褐鉄鉱を全体に含む。流れ込みの層位。
- 3a. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa 層を全体的に多量に含む。VIIIb 層を全体的に多量に含む。褐鉄鉱を部分的に微量に含む。VIIIb 層より明色。
- 3b. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり、締まりあり VIIIa・VIIIb 層を全体に多く含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。
- 4a. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa・VIIIb 層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。
- 4b. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIa 層を全体的に多量に含む。VIIIb 層を全体的に多量に含む。褐鉄鉱を部分的に少量含む。4a より明色である。
- e2. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、締まりあり VIIIb 層を全体に多量に含む。黒褐色土 (10YR3/2) を部分的に含む。褐鉄鉱を全体に含む。
- 5. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIb 層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を少量含む。
- 6. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、締まりあり VIIIb 層を全体に多量に含む。褐鉄鉱を少量含む。流れ込み。

第24図 第2号周溝状遺構実測図 (3) (SX02)

第2号周溝状遺構覆土内焼成面土層説明 a-a' b-b'

1. 赤褐色土 (5YR4/6) 粘性あり、縮まりあり 焼土 (Φ1～5 mm) 全体的に、多量に含む。焼土の硬化面で焼成が著しい。
2. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性あり、縮まりあり 焼土を全体的に含む。VIIIa層に近い色調。
3. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性あり、縮まりあり 焼土を全体に多く含む。にぶい色調である。
4. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性あり、縮まりあり 炭化物を全体に多量に含む。

第25図 第2号周溝状遺構実測図(4) (SX02)



第26図 第2号周溝状遺構出土遺物実測図 (SX02)

第7表 第2号周溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (推定 口径) (cm)	底径 (推定 底径) (cm)	器高 (推定 器高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
26-1 7-SX02-1	SX02	土師器	甕	底部	5	-	9.0	<3.1>	外面：縦位ヘラ調整、内面：ヘラナデ・ナデ、底部：ヘラ調整	赤色粒・角閃石	良	2.5Y5/2 暗灰黄色	古墳前
26-2 7-SX02-2	SX02	土師器	壺	口縁～ 頸部	5	(15.0)	-	<7.6>	外面：縦位ミガキ、口縁内面：ミガキ、内面：ヘラナデ・ナデ	長石・角閃石	良	7.5YR5/3 にぶい褐色	古墳前 複合口縁、外面～ 口縁内面赤彩

第3号周溝状遺構 -SX03

遺構 (第27図 図版5-5)

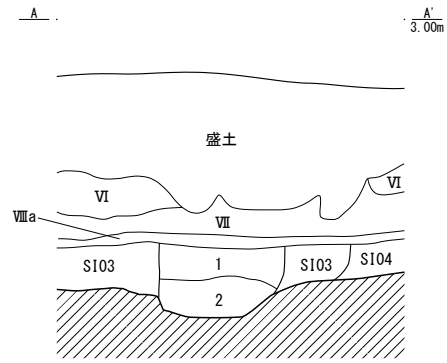
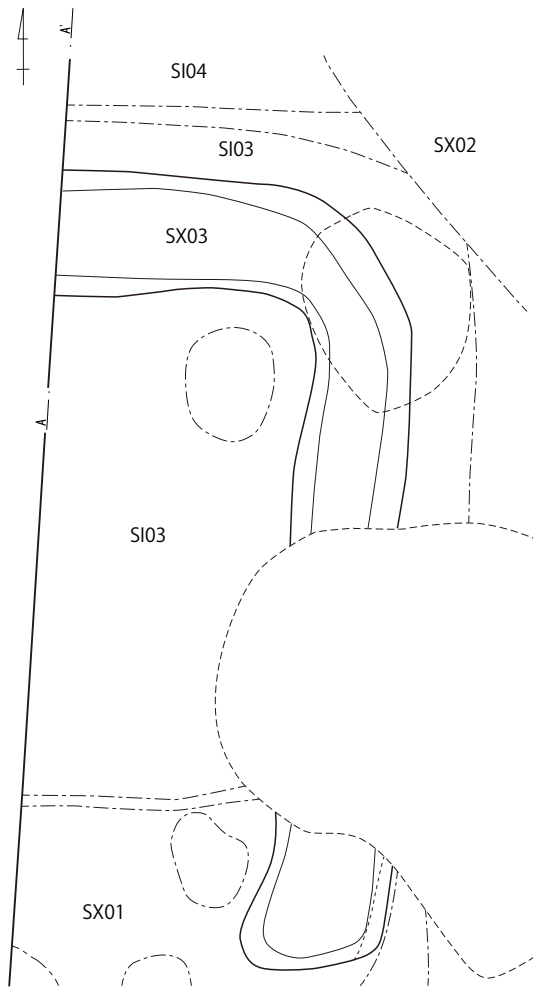
位置：A-3・4グリッド。重複関係：第3号住居跡を切る。第1号周溝状遺構に切られる。主軸方位：不明。規模・形態：西壁で調査区外へ続いており、検出部分の平面形は西壁より東側へ延び、途中で南側へ90度折れる逆L字状を呈する。検出部分での平面規模は、長さは東西方向1.62m、南北方向3.93mを測る。断面形は、やや不整な逆台形を呈する。確認面からの深度は40cmである。覆土：2層に区分される。堆積状況は自然堆積によると思われる。備考：本遺構は遺構形状、遺物出土状況、切り合い関係から「周溝状遺構」として報告するが、SI03建替えの際の掘り方であった可能性がある。また、SX01と同一遺構である可能性がある。

遺物 (第28図 第8表 図版7)

出土状況：遺物は全て土師器で破片点数52点、総重量273gが出土した。掲載した遺物は土師器2点である。1は坩の胴部から底部で、外面に赤彩が施される。

時期

出土遺物から、古墳時代前期が推定される。



第3号周溝状遺構覆土内焼成面土層説明 A-A'

- VI. 灰色土 (5Y4/1) 砂質土 粘性普通、縮まりあり 褐鉄鉱を全体に多量に含む。白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。炭化物 (Φ3 ~ 10 mm) を部分的に微量に含む。土層がややグライ化している。
- VII. 灰赤色土 (2.5Y5/2) 粘質土 粘性あり、縮まりあり 焼土 (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量を含む。炭化物 (Φ10 mm) を部分的に微量に含む。マンガン (Φ3 ~ 5 mm) を部分的に微量に含む。土層にクラックが入る。
- VIIIa. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、縮まりあり 白色粒子 (Φ0.5 ~ 1 mm) を部分的に微量に含む。VII層を全体に多量に含む。VII層との漸移層。VIIIb層よりやや色調が明るい。
- 1. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘性ややなし、縮まりややあり Ixa層を全体に微量に含む。
- 2. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性ややあり、縮まりややあり Ixa層を全体に少量含む。

第27図 第3号周溝状遺構実測図(1) (SX03)



第28図 第3号周溝状遺構出土遺物実測図 (SX03)

第8表 第3号周溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (推定 口径) (cm)	底径 (推定 底径) (cm)	器高 (推定 器高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
28-1 7-SX03-1	SX03	土師器	埴	胴部~ 底部	30	(4.4)	2.0	-	外面：ミガキ、内面：ヘラナデ・ナデ、 外面赤彩	赤色粒・角閃石	良	2.5Y6/3 にぶい黄色	古墳前
28-2 7-SX03-2	SX03	土師器	甕	底部	5	-	(7.0)	<2.5>	内外面：ヘラナデ	赤色粒・白色粒・ 雲母	良	10YR5/4 にぶい黄褐色	古墳前

### 第3節 ピット

ピット (第29図 第9表)

位置：P1～P3はB-3グリッド、P4はB-4グリッド、P5はA-4グリッド、P6はC-2グリッド。

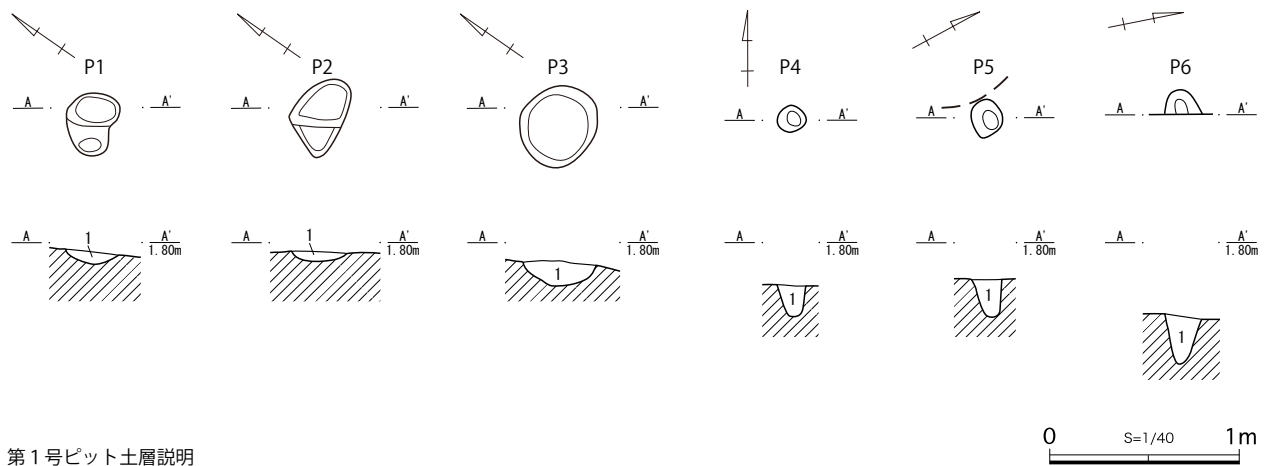
覆土：全て単層である。

遺物

出土状況：P1、P2からの遺物出土はない。P3は土師器12点、総重量30g、P4は土師器2点、総重量2g、P5は土師器1点、総重量6g、P6は土師器1点、総重量2gがそれぞれ出土しているが、いずれも小破片のため図示可能な遺物はない。

時期

出土遺物と覆土の様相から、古墳時代前期の可能性がある。



第1号ピット土層説明

1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、縮まりあり VIIIa層を部分的に微量に含む。VIIIb層を部分的に少量含む。

第2号ピット土層説明

1. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり、縮まりあり VIIa層を部分的に少量含む。

第3号ピット土層説明

1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、縮まりあり VIIa層を部分的に少量含む。褐鉄鉱を少量含む。

第4号ピット土層説明

1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、縮まりあり VII層を全体に含む。IXa層を全体に含む。

第5号ピット土層説明

1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり、縮まりあり VII層を全体に多くに含む。IXa層を全体に多量に含む。VII層がIXa層より多い。

第6号ピット土層説明

1. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、縮まりあり IXa層を部分的に少量含む。

第29図 第1～6号ピット実測図 (P)

第9表 ピット計測表

遺構番号	主体覆土	覆土堆積状況	平面形態	規模長径 (cm)	規模短径 (cm)	断面形態	確認面からの深さ (cm)	出土遺物	備考	主軸方向
P1	暗褐色土	単層	不整形	33.2	28.4	ボウル状	8.9	無		N-55°-W
P2	黄褐色土	単層	不整形	42.7	27.6	ボウル状	5.5	無		N-87°-W
P3	黒褐色土	単層	円形	43.9	38.9	ボウル状	14.0	土師器		N-87°-W
P4	黒褐色土	単層	円形	15.2	13.8	U字状	17.0	土師器		N-73°-W
P5	黒褐色土	単層	不整形	20.6	17.2	U字状	20.4	土師器		N-51°-E
P6	暗褐色土	単層	不整形	19.9	(13.0)	U字状	26.7	土師器		-

## 第4章 まとめ

今回の発掘調査では、古墳時代前期の住居跡4軒、周溝状遺構3基、その他ピット6基を検出した。以下に遺構種別ごとに今回の発掘調査の成果について述べる。

### 1 住居跡

古墳時代前期の住居跡は4軒検出した。これらのうち、第2号住居跡および第4号住居跡は、部分的な検出であったため全体の形状を明らかにすることができなかった。

第1号住居跡は当該期の住居跡によく見られる隅丸形状の竪穴住居である。生活面の調査後、構造面まで掘り下げを行い入念に柱穴の有無を確認したが、支柱穴と思われるピットは南東部に1基を検出したのみであった。本住居跡は、覆土から検出した多量の焼土、炭化物から焼失住居であったと考えられる。南原遺跡では、これまでも第2次調査で2軒、第5次調査で5軒、第6次調査で3軒の焼失住居が検出されていることから、本調査を含めた当該期既報告の竪穴住居56軒のうち、約20%が焼失住居であったということになる。本遺構では、床面直上から竪穴住居上部構造部材が崩落したものと考えられる大型の炭化材を放射状に検出した。これらは竪穴住居の構造を復元、考察する上でも重要な資料であると考えられる。当該期において焼失住居の検出数が増加するという点については、これまでも指摘がなされているが、その原因や背景については今後の検討を要する。

第3号住居跡は、その重複関係からもっとも解釈が困難であった遺構である。本遺構では南壁に壁溝を確認しており、中央部から支柱穴と思われるピットを2基検出した。西半は調査区外へと続くが、4本の支柱を有する隅丸方形の竪穴住居であったと考えられる。本調査では、第3号住居跡調査区西壁で確認した土層断面から、重複して確認された遺構がそれぞれ時間差をもって構築されたものであると判断した。西壁断面からは、①第3号住居跡の構築→②第3号竪穴住居跡の埋没→③第1・3号周溝状遺構の構築という3段階の遺構形成段階を想定することができる。また、第3号住居跡の覆土下層からは、貼床や地床炉から明確な生活面を確認し、住居跡埋没後にこの生活面を破壊して第1・3号周溝状遺構が構築されたことを確認した。したがって、第3号住居跡、第1号周溝状遺構、第3号周溝状遺構をそれぞれ独立した遺構として報告したところである。

一方で、第1・3号周溝状遺構の平面プランが第3号住居跡のプラン内にきれいに収まるように検出されたことは注目すべき点であり、第3号住居跡との関係性を検討する必要がある。現状では根拠を示すことは困難であるが、第1・3号周溝状遺構が第3号住居跡を同じ場所に建て替えるために掘削された“掘り方”であった可能性も考えられる。この場合の生活面はⅧa層より上位に存在し、現在は残存していないことになるが、第1号周溝状遺構の遺物出土状況も含めて今後の検討を要する。

### 2 周溝状遺構

古墳時代前期の周溝状遺構は3基検出した。

第1号周溝状遺構、第3号周溝状遺構は、第3号住居跡プラン内で重複して検出された。断面で切り合いを確認していないが、遺物の平面分布から第1号周溝状遺構を新、第3号周溝状遺構を旧と判



断した。第3号住居跡との関係性については、先述したとおりである。第3号周溝状遺構は部分的な検出ではあったが、南方に開口部を有する「コ」の字形の平面形状を呈していたと推定すると、一辺の長さが3.93 m程の規模であったと思われる。一辺の長さが4 mを下回る周溝状遺構は、市内ではこれまでに鍛冶谷・新田口遺跡事業団調査時の「第24号方形周溝墓」、「第70号方形周溝墓」を除いて検出事例がない（西口1986）。本遺構が、戸田市域で150基以上確認されている他の周溝状遺構と同種のものであったと仮定すると、当該期の周溝状遺構の中では最小規模のものであるとすることができる。しかしながら、遺構の形態や規模の差異から第3号周溝状遺構を本調査第2号周溝状遺構などと同様の性格・機能を有していたものと判断するのは早計であると考えられる。周溝状遺構と一括して呼称されている遺構の性格・機能についても①「方形周溝墓」、②「伏屋式竪穴建物」、③「伏屋式平地建物」、④「高床の掘立柱建物」、⑤「壁立式平地建物」などの分類が提示されている現在（福田2014）、本遺構の性格・機能の判断については、類例の増加を待つこととしたい。

第1号周溝状遺構は、周溝端の一部分の検出ではあったが、ここから甕、壺、器台、鉢などが一括投棄を想起させる出土状況で検出されている。第1号周溝状遺構と第3号周溝状遺構は、第1号周溝状遺構出土遺物の平面分布から構築時期に時間差があると報告したが、それぞれの端部が接続することから同一遺構である可能性も指摘できる。

第2号周溝状遺構は、南半部のみを検出であったが、全体の形状は南東部に開口部を有する隅丸形状を呈していたものと考えられる。南原遺跡において、南東部に開口部を有する周溝状遺構はこれまでに第2次調査B区、第9次調査、第11次調査で検出されていることから、周溝状遺構の開口部方位に一定の規則性を看取することができる。本遺構の北西辺覆土上層では、焼土および炭化物の集中分布箇所が検出されている。覆土断面（SX02 B-B'）からは、第2号周溝状遺構が遺構確認面まで埋没した後に、一度掘り返し行為が行われ、この焼土・炭化物集中分布箇所も掘り返しが行われた際に形成されたことがわかっている。残念ながら、これらの痕跡が当時の人々のどのような行動結果として表出したのかを述べる根拠を得ることはできなかったが、何らかの儀礼的な行為の結果であった可能性が考えられる。

## 結語

今回の発掘調査では、古墳時代前期に帰属する多くの遺構・遺物を検出した。南原遺跡は戸田市を代表する遺跡としてその存在が知られているが、その範囲や遺跡の内容については未だ不明な点が多い。今回の発掘調査によって、南原遺跡がこれまでの把握されていた範囲のさらに西方へ広がることが明らかとなり、また、遺跡の北西端に広がる当該期の集落の様相を明らかにすることができたのは大きな成果であると言える。

今後、本調査によって検出した資料を他の遺跡で検出された資料と比較、検討していくことによって、当時に生活を営んだ人々の社会や文化を紐解くための一助となっていくことを期待する。

## 引用・参考文献

- 赤熊浩一 2012 『南原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 396 集 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩井聖吾・坂上直嗣・山寄裕子  
2013 『南原遺跡XI』 戸田市文化財調査報告XVIII 戸田市教育委員会
- 岩井聖吾・若松良一  
2015 「付篇 南原遺跡第 8 次発掘調査出土の埴輪について」『前谷遺跡IV』 戸田市文化財調査報告XX 戸田市教育委員会
- 小島清一 1991 『南原遺跡V』 埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第 3 集 戸田市遺跡調査会  
1996 『南原遺跡VI』 埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第 5 集 戸田市遺跡調査会
- 塩野博 1969 『南原（高知原）遺跡第 1 次発掘調査概要』 戸田市文化財調査報告III 戸田市教育委員会  
1972 『南原（高知原）遺跡第 2・3 次発掘調査概要』 戸田市文化財調査報告V 戸田市教育委員会  
1981 「第 2 章 第 2 節 南原遺跡」『戸田市史 資料編 1 原始・古代・中世』 戸田市
- 早田利宏・河野一也・井博幸  
2010 『南原遺跡IX』 戸田市文化財調査報告XVII 戸田市教育委員会
- 福田聖 2000 『方形周溝墓の再発見』ものが語る歴史 3 同成社  
2014 『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』 六一書房



1 調査区全景



2 第1号住居跡炭化材・遺物出検出状況（南東より）





1 第1号住居跡遺物検出状況(1)(南より)



2 第1号住居跡遺物検出状況(2)(南より)



3 第1号住居跡完掘状況(南より)



4 第1号住居跡P1土層断面(南より)



5 第1号住居跡掘方完掘状況(南東より)





1 第2号住居跡完掘状況（東より）



2 第2号住居跡土層断面（西より）



3 第2号住居跡掘方完掘状況（南東より）



4 第3号住居跡遺物検出状況（1）（東より）



5 第3号住居跡遺物検出状況（2）（東より）





1 第3号住居跡完掘状況（東より）



2 第3号住居跡土層断面（東より）



3 第4号住居跡完掘状況（東より）



4 第1号周溝状遺構遺物検出状況（1）（西より）



5 第1号周溝状遺構遺物検出状況（2）（南より）





1 第1号周溝状遺構完掘状況（東より）



2 第2号周溝状遺構遺物出土状況



3 第2号周溝状遺構完掘状況（南東より）



4 第2号周溝状遺構土層断面（南より）



5 第3号周溝状遺構完掘状況（東より）



第 1 号住居跡出土遺物



第 2 号住居跡出土遺物

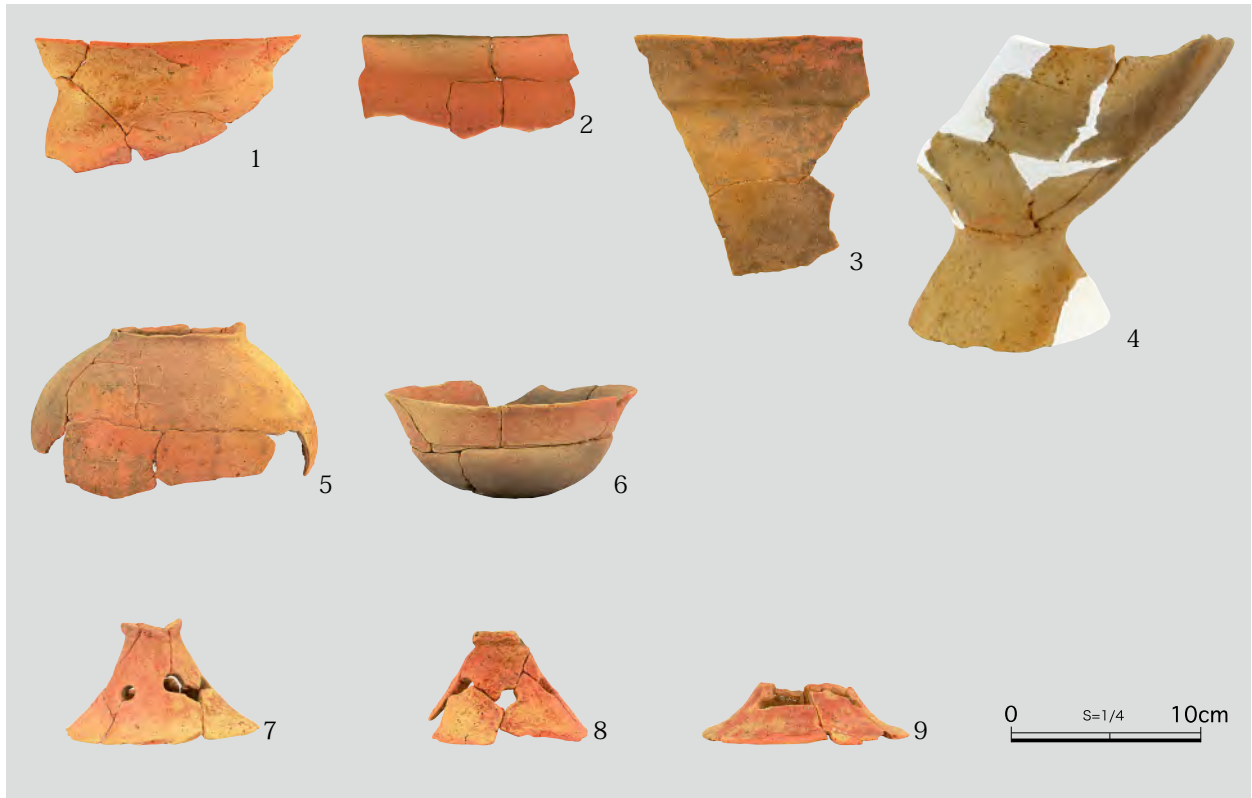


第 3 号住居跡出土遺物

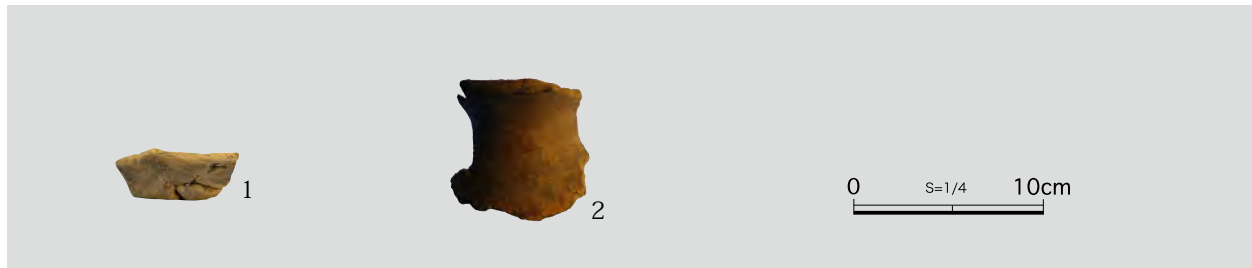


第 4 号住居跡出土遺物





第1号周溝状遺構出土遺物



第2号周溝状遺構出土遺物



第3号周溝状遺構出土遺物

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみはらいせきじゅうさん まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ							
書名	南原遺跡 XIII 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	戸田市文化財調査報告							
シリーズ番号	22							
編著者名	岩井聖吾、諸星良一							
編集機関	戸田市教育委員会							
所在地	〒 335-8588 埼玉県戸田市上戸田 1-18-1 Tel 048 (441) 1800							
発行年月日	西暦 2015 (平成 27) 年 3 月 25 日							
コード								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みなみはらいせき 南原遺跡 だいじゅうさんじちようさ 第 13 次調査	とだしみなみまち 戸田市南町 2301 番地 1・2	11224	06-002	35° 48' 15"	139° 40' 25"	2014.8.18 ～ 2014.9.6	154.24 m <sup>2</sup>	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南原遺跡	集落跡	古墳時代 前期	住居跡 4 基 周溝状遺構 3 基 ピット 6 基	土師器		<ul style="list-style-type: none"> <li>・荒川流域の微高地上でよく検出される周溝状遺構を 3 基検出した。</li> <li>・住居跡 4 軒のうち、焼失住居を 1 軒検出した。</li> </ul>		
要 約	<p>本調査地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地である南原遺跡の範囲に属し、JR 埼京線戸田公園駅から南西に約 650m の戸田市南町 2301 - 1, 2 に位置する。</p> <p>南原遺跡は、荒川によって形成された平坦な沖積地（荒川低地）に氾濫や流路変更によって発達した微高地（自然堤防）上に立地している。調査の結果、古墳時代前期の住居跡 4 軒、周溝状遺構 3 基、その他ピット 6 基を検出した。</p> <p>本調査によって、南原遺跡の範囲がさらに西方へと延びることが判明し、これまで不明であった遺跡北西端における弥生時代後期から古墳時代前期の集落の様相が明らかとなった。</p>							

戸田市文化財調査報告 X XII

## 南原遺跡 XIII

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行・編集 埼玉県戸田市教育委員会  
〒 335-8588 埼玉県戸田市上戸田 1-18-1  
TEL 048 (441) 1800  
印刷 関東図書株式会社  
〒 336-0021 埼玉県さいたま市別所 3-1-10  
発行日 平成 27 年 3 月 25 日